

2025年度
慶應義塾大学学部合同特別実習
稚内市地域診断報告書
B班

実習期間

2025年8月18日～8月30日

メンバー(B班)

薬学部4年 石原響

薬学部2年 清水美衣奈

看護医療学部2年 鈴木理子

看護医療学部2年 竹枝里紗

医学部2年 鈴木実由

医学部1年 岩橋諄治

ファシリテーター

看護医療学部3年 吉田光翔

1.事前準備

【目的】既存の情報を収集・分析し、稚内という地域特有の問題や健康問題を特定する。
また、特定した問題の原因について仮説を設定し、現地での行動に繋げる。

【スケジュール】

日程	形式	概要
6/17 22:00~	zoom	全体顔合わせミーティング 自己紹介
6/25 22:00~	zoom	B班初回ミーティング 今後の流れ確認
6/26	LINE	情報収集項目の列挙
6/30	LINE	項目別情報収集の役割分担
7/1~7/7	Google Drive	各担当分野 情報収集の結果 まとめ
7/9 22:00~	zoom	収集した情報の共有 今後の流れ確認
7/17 18:00~	対面(信濃町キャンパス)	仮説・大まかなインタビュー内容 の決定
7/20 18:00~	zoom (飯田光 様・本間正博 様)	インタビュー先、アンケート実 施の相談
7/23	LINE	インタビュー先、アンケート内 容の決定、作成
7/31	LINE	各調査先への依頼書作成、 提出
8/4 18:00~	zoom (飯田光 様)	依頼書・インタビュー内容に ついてのフィードバック
8/5~8/8	LINE	依頼書・インタビュー内容の 追加、修正
8/9 19:00~	zoom (飯田光 様)	現状のフィードバック 訪問先・訪問人数の確定
8/10~8/16	zoom	各担当分野 質問形式、内容 のすり合わせ
8/17	LINE	現地でのスケジュール最終 確認

2.現地での活動：各訪問先の調査結果と学び

【生活班】

仮説①：「観光客の体験や声を通して、地元の人が稚内の隠れた魅力を再発見できるのではないか」（文責:岩橋諄治）

稚内では、令和2年より観光客数が年々増え続けており、令和6年では観光客数が516,400人となっている(※1)。一方、稚内市の人口は平成23年より減少の一途をたどり、令和6年には30,336人まで減少している(※2)。このような差異から、地域住民が日常的に接している風景や文化は当たり前のもので意識されにくくなっている一方で、観光客にとっては新鮮かつ価値ある体験として受け止められている可能性がある。実際、観光客は旅先で得た感動や魅力をSNSや口コミで積極的に発信する傾向があり、その中には地元住民が見過ごしている自然環境、食文化、歴史的背景などが含まれることが多い。さらに、観光による交流を通じて外部からの視点もたらされることで、住民が自らの地域資源を改めて評価し直す契機となる。したがって、観光客の体験や声は、人口減少が進む中で稚内の隠れた魅力を再発見し、地域アイデンティティの再構築や地域活性化につながる重要な手掛かりになり得ると考え、この仮説を立てた。

(※1)稚内市「令和6年度 観光入込客数調査結果」

<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/sangyo/kanko/tyosa/kankokekka.html>

(※2)稚内市「稚内市のご紹介」

<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/gaiyo>

■稚内市樺太記念館 石松さん(60代)

【概要】

日時: 8/19 14~15時

場所: 稚内市樺太記念館

経歴:

樺太記念館の館員。10年前に稚内に定住した。

インタビューの目的:

樺太記念館では来館者の出身についての調査があったため、その情報から稚内にいる観光客について知ることを目的にした。

インタビューの実施形式:

稚内市樺太記念館にて実施した。

【分かったこと】

・稚内に訪れる観光客について

観光客のうち、台湾・香港の方が一番多い。中国本土から訪れてきたお客さんは減っているとわかった。また、稚内を訪れる季節については、夏の方が観光客が最も多い。冬は寒すぎるからほとんど観光客がいないということがわかった。

【考察】

実際、台湾や香港から多くの観光客が訪れていることは、彼らが稚内に独自の魅力を見出していることを示している。例えば、地元の人にとっては日常的な風景や食文化が、観光客の目には「特別な体験」として映り、SNSや口コミを通じて積極的に発信される。その発信内容を地元の人が目にするすることで、当たり前だと思っていた景観や食の価値を再認識する契機となると考えられる。

また、観光客が特に集中する夏の体験談からは、自然の美しさや離島観光の魅力が強調される一方で、冬に人が少ないという現状は、地元にとって新たな観光資源の発掘や季節に応じた楽しみ方の再考を促す要因と考えられる。

■記念館にいた台湾人観光客(ファミリー)

【概要】

日時: 8/19 15時

場所: 稚内市樺太記念館

経歴:

台湾から旅行で稚内を訪れた一家。

インタビューの目的:

稚内を訪れた理由や、来て感じたこと、現地で体験すること、不便に感じたことを知ることを目的にした。

インタビューの実施形式:

稚内市樺太記念館にて実施した。

【分かったこと】

1. 稚内を訪れたきっかけについて

北海道旅行の際、「せっかくなら日本の最北端も見たい」と思い、札幌からドライブして足を運んだとわかった。

2. 稚内に実際に来て感動した事について

最初は「日本最北端」という点しか意識していなかったが、実際に訪れてみると、町の穏やかな雰囲気や人の少なさ、さらに新鮮で美味しい海鮮に強く惹かれたとわかった。

3. 稚内で実際不便に感じた事について

実際に不便に感じたことは特になかった。札幌からの道の標識はわかりやすく、現地の方々もとても親切だった。事前の Recherche では「線路沿いの店は閉店時間が早く、夕食をとる場所が少ない」と心配していたが、実際にはそうした不便さはあまり感じなかった。やはり道内の移動は車のドライブが最も便利なのだろうと推測できる。

4. 稚内での過ごし方について

稚内での過ごし方としては、宗谷岬をはじめとする観光スポットを巡ったり、フェリーに乗って礼文島や利尻島を訪れたりすることができる。また、新鮮で美味しい食事を楽しんだり、市内のカフェを巡ったりするのも魅力の一つであるとわかった。

【考察】

観光客が稚内を訪れるきっかけは「日本最北端を見たい」という単純な理由であったが、実際に来てみると町の雰囲気の穏やかさや人の少なさ、美味しい海鮮といった要素に強く惹かれていた。これは地元の人にとっては日常であり意識されにくいものだが、観光客の目には特別な魅力として映っていることを示している。また、不便さについても事前の心配とは異なり「特に不便を感じなかった」という感想があり、むしろ標識の分かりやすさや現地の人々の親切さが高く評価されていた。こうした声は、地元住民が自分たちの地域の利便性やおもてなしの力に改めて気づく手がかりとなるだろうと考えられる。さらに観光客の過ごし方としては宗谷岬や離島観光に加え、食やカフェ巡りといった日常的な行動が挙げられていたことから、地元住民が当たり前と思っている日常の暮らしや文化そのものが、観光資源として十分に価値を持つことが明らかになった。これらのことから、観光客の体験や声を通じて、地元の人が稚内の隠れた魅力を再発見できる可能性が高いと考えられる。

以上の質問内容から、私たちは観光客からは稚内の魅力を再認識できるが、それには限界を感じた。なぜなら観光客は稚内での滞在日数が短く、またほとんどが観光目的であるため市民との交流が少ないという問題があった。そこで私たちは、観光客より稚内に滞在日数が圧倒的に多く、かつ仕事や日常生活で稚内市民との交流も必要である在日外国人に目を向けた。彼らこそが、稚内の魅力を現地の住民に再認識させることができると考えた。

特に在日外国人は、地域社会の一員として日常生活を営む一方で、観光客と同じように「外部の視点」を持ち合わせている。この二重の立場から、地元の人にとっては見過ごされがちな魅力を発見し、それを市民との交流の中で伝えることが可能である。例えば、日常的に利用する商店や公共施設、あるいは地域行事への参加を通じて、彼らを感じた稚内の良さや改善点は、住民にとって新たな気づきとなり得る。したがって、観光客の声とあわせて在日外国人の視点を取り入れることは、稚内の隠れた魅力をより深く再認識し、地域活性化につなげる重要な手がかりになると考えられる。

そのため、我々生活班は路線変更を選択し、稚内に在住する在日外国人に関する仮説を改めて立てた。

仮説②:「稚内では外国人の方との交流が十分ではないのではないか」(文責 竹枝里紗)

仮説の詳細と立案に至った経緯:

1. 稚内では、平成28年の306人から令和7年には712人へと、約2.3倍に外国人が増加していることが分かる。全体人口が約3万人の稚内で、このような外国人の人口増加は生活面において大きな影響を与えるのではないかと懸念されている。外国住民が増えたからと言ってすぐに日本人住民との交流機会や、生活をサポートするコミュニティ基盤が自動的に整備されるわけではない。この増加スピードと、交流・生活支援体制の整備スピードとの間にギャップが生じているのではないかと懸念が仮説の出発点となった。

2. 稚内新聞の報道により、「バスの乗り方や支払い方法が分からない人がいる」という現状が明らかになった。バスの利用という基本的な生活インフラに関する情報が外国人に届いていない、もしくは理解されていないという事実は重大である。これは単に情報提供の不足を意味するだけでなく、地域住民との日常的なコミュニケーション不足や生活習慣に関する助言を得る機会(交流)が十分でないために、基本的な生活情報すら得られていない可能性を示唆している。

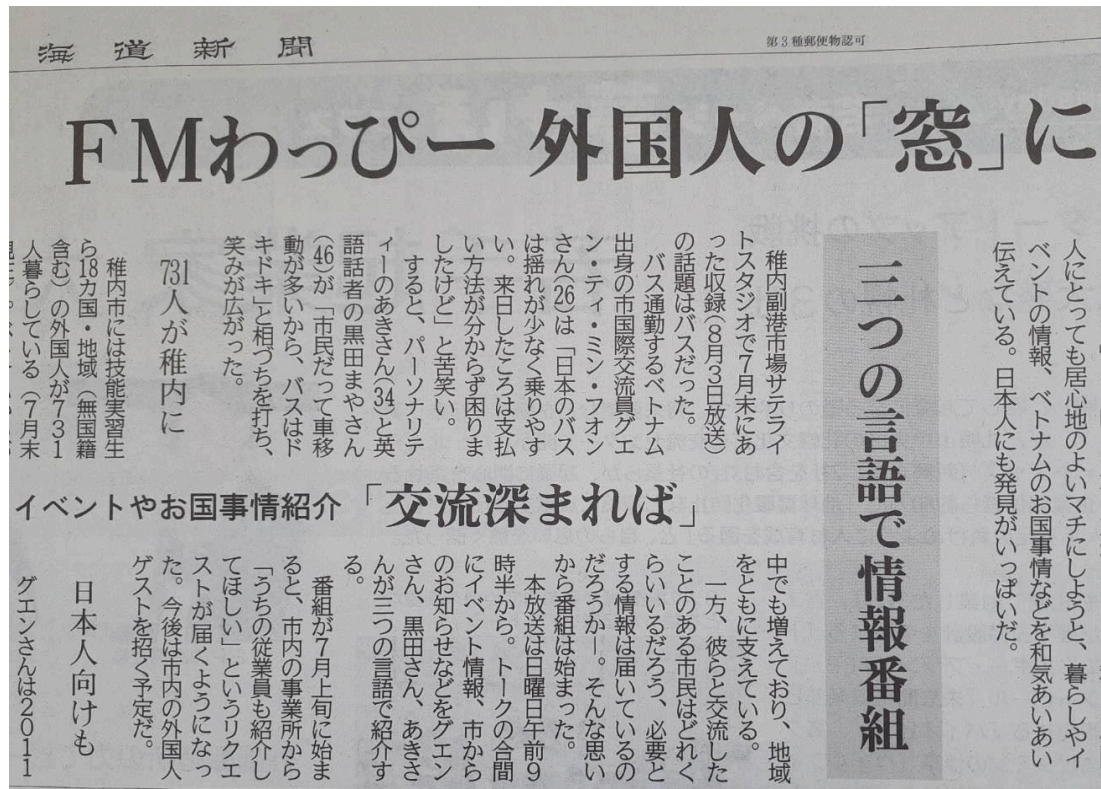
3. 稚内に住む外国人の9割が日本人と交流したい、日本語を学びたいと思っている。外国人の交流意欲が十分高いにもかかわらず、前述した問題が生じているということは、稚内市民との交流の場や機会が不足しているのではないかと懸念されている。

これらの経緯から、稚内市では、外国人住民が増加しているにもかかわらず、交流の場や機会が不足している。その結果として在日外国人にとって生活上の問題が発生しているのではないかと考えた。つまり、「稚内では外国人との交流が十分ではないのではないかと懸念されている」という仮説を立てた。

【参考文献】

稚内外国人へのアンケート: [広報わっかない 2025年2月号](#)

稚内市人口推移: <https://share.google/ArEUvctlaIxmLjwzH>



■梅村俊範さん、平間さんご夫婦

【概要】

日時: 8月22日

場所: 株式会社恵菱設備

経歴:

梅村さん: 社会福祉法人稚内福祉会 理事長、株式会社 恵菱設備 代表取締役、日本語教室 校長

平間さん: 校長先生、宗谷勤医協友の会町づくり連携室、日本語教室の運営

インタビューの目的、狙い: 「稚内では外国人の方との交流が十分ではない」という仮説を、外国人実習生を受け入れている梅村さんに外国人の普段の様子や暮らしやすさについて尋ねる。また、外国人と稚内市民の交流度について調査を実施する。得られた知見は、稚内市が多文化共生社会を推進し、外国人住民の増加という変化を市の持続的な発展に繋げるための、具体的なアクションプラン策定の基礎情報として活用するため。

インタビューの実施形式:グループインタビュー

【分かったこと】

(梅村さん)

- ・5年間の実習後、海外実習生は帰国をしてしまうが、稚内に戻ってきて暮れることが多く、結果的に仕事の担い手になること。
- ・日本人よりまじめな人も多く、介護施設の利用者からの評価も高いこと。交流したいとは特に思っていないけど、普通にお話はします。そういう方は多いと思う。昔からのロシア人とソビエト人との交流があるため、特に違和感はない。会社ごとに交流は進んでいる。
- ・実習生が稚内に住む上での問題点は、交通の便である。実習生は、家や交通などの補助がある方が来てくれること。実習生の家賃は梅村さんが持っている。

(平間さん)

- ・自身が学校教員になった際、「子育て運動」をきっかけに学校と地域を結びつけ、「地域PTA」を創設し、子どもが地域で育つためのプラットフォームを築いた。
- ・地域の子どもたちの元気がなくなり、特に人との会話力(相手の気持ちを読み取る力)が極端に弱くなっている。この会話力の低下の最も強い原因は、親子同士の会話が弱くなっていることにある。
- ・在日外国人の方と特に交流したいとは思っていないが、普通にお話をする。
- ・一般市民の意識:自身と同様に「交流したいとは思っていないが、普通にお話をする」という市民は多いだろうと考えている。
- ・町内会は地域課題の解決や連携のプラットフォームとして町内会が極めて重要な役割を果たしてきたことが示唆される。

【考察】

インタビューを通して分かったことは、以下の通りである。稚内では実習生が増加している一方で、稚内市民との交流が少なく、交通の便などの面において生活に困ることがあるということだ。さらに、外国人ということでの差別等はないが、とくに積極的に関わりたいという気持ちを持っている市民は少ないため交流の場も少なくなっていると考察する。また、若者のコミュニケーション能力の低下が進んでおり、地域の町内会への参加率の低下にもつながる可能性があると考えられる。地域PTAにより、地域が良質な子育ての場となっているため、今後も継続していくことで、子供たちと地域の人との交流の場ができ、コミュニケーション能力の増加の機会ができる。

■稚内市国際交流員 フォンさん

【概要】

日時:8月21日

場所:稚内市市役所

経歴:稚内市国際交流員

インタビューの目的、狙い: 稚内における多文化共生の現状を理解し、地域と外国人がより自然に共に生きるための課題と可能性を探る。

インタビューの実施形式: グループインタビュー

【分かったこと】

・稚内では外国人と地域住民の間に温かい関係が築かれつつある一方で、まだ十分な交流機会が少ないことが分かった。稚内の人々は外国人に対して親切で、抵抗感も少なく、外国人も「日本語を使う場があって嬉しい」「市民と関わって楽しい」と感じている。特にお祭りやボート大会など、地域行事を通じた交流が外国人にとって貴重な接点になっていることが明らかになった。

・一方で、日常生活では交通の不便さや言語の壁、冬の厳しい気候など、生活上の困難が依然として存在する。日本語教室などの支援活動は行われているが、参加者は限られており、より多くの外国人や学生ボランティアの参加が求められる。

・これらの結果から、稚内は多文化共生の基盤となる「人の温かさ」を持ちながらも、交流の継続性と広がりを支える仕組みが十分ではないことが分かった。今後は、顔の見える関係づくりや言語支援を通じて、外国人が「この街に住み続けたい」と思える環境を整えていくことが重要であるとわかった。

■ひかり町内会長 佐藤忠男さん

【概要】

日時: 8/25 10時～11時

場所: 保健福祉センター

経歴:

小学校時代から稚内に住む。稚内高校を卒業したのち、稚内市役所に42年間勤務。北海道の社会福祉議会というところで福祉関係の仕事をしていた。その後、宗谷の振興局に9年いた。平成31年に町内会長に就任。今年で7年目。

インタビューの目的、狙い:

稚内市の強みである「人同士の繋がりやネットワーク」が、若者の流出やコミュニケーション能力の低下により失われつつあるという実習を通して立てた仮説を検証し、誰もが(特に若者が)参加しやすい持続可能な町内会・地域共生社会を実現するためのアクションプランを立案すること。

【分かったこと】

- ・上記の仮説に対しては、「おっしゃる通り」と同意していた。
- ・若者の流出については、体感として高校進学時には9割が地元に残るが、高校卒業後には札幌・東京方面への流出が増え、稚内に残るのは1割程度であること
- ・流出の原因は、稚内市に就職先や大学が少ないこと

・若者のコミュニケーション能力は全体的に低下していると感じる

・町内会参加率は低下している

→昔は町内会館での葬儀など「万が一の際は町内にお世話になる」という意識が強かったが、葬儀形式の変化などにより、町内会との接点が激減し、この意識が薄れた。

・参加率が悪かった人が良くなることは少ないが、「イベントで手伝ってくれること」が唯一のきっかけとなる。

・南地区に、外国人はわずかに住んでいるが町内会への参加はない。

・地域共生社会実現のために「挨拶運動」を心掛けている。

【考察】

葬儀などの形態が変わったことやインターネットによる通販の普及により、昔のようにまちの人に頼って暮らすという意識がなくても暮らすことができるようになった。町内会参加率が低下することにより、今後町内会のイベント維持が難しくなってしまう可能性がある。若者、もしくは在日外国人の人手を借りることが重要になる。また、就職や進学タイミングで、やむを得ず稚内を出る若者が多いのは事実なので、「稚内に帰りたいけど機会がない」という若者に対し、「みんなで戻ってくる環境づくり」が必要である。

アクションプラン

①在日外国人の町内会参加

日本語教室の生徒や外国人実習生を受け入れている企業を通じて、出店に意欲のある外国人住民を募る。日本人のサポーターを配置し、町内会に出店者として参加してもらう。

②まちの先生プロジェクト

地域に住んでいる高齢者や小学生など、老若男女問わず自分の得意を活かして先生になることができる。先生になることで、地域住民同士の繋がり形成や、居場所の確保が見込める。

【(解決しようとしている)課題】

①では、事前調査やインタビューを経て明らかになった稚内市民と外国人との交流不足、また調査を通して浮き彫りとなった若者の流出や高齢化に伴う町内会の衰退の問題について解決を図る。

②では、子供たちのコミュニケーション能力の低下や町内会の衰退に伴う、世代を越えたつながりの希薄化の問題について解決を図る。

①、②のアクションプランを通して稚内市を「多文化、多世代を越えた地域共生社会」にし続けることが目標である。

【期待される効果】

①在日外国人の町内会参加

・食という文化は異なっても共通するものを通して、稚内市民と在日外国人が交流できる機会を生み出すことができる。

・市民は、外国人住民の持つ文化的な魅力を身近に体験し、相互理解が進む

・在日外国人は、地域に役割を持つことで貢献感や地域での居場所が見つかる

・人手不足である町内会に新たな担い手を巻き込むことで、イベントの規模や質が向上し、今まで参加していなかった住民も参加する機会が生まれる

②まちの先生プロジェクト

・老若男女関係なく対等な立場で交流することで、世代間の壁をなくす

・若者が「先生」として自身の得意なこと(PC、SNS、趣味など)を教える役割を担うことで、地域における存在意義と自信を得ると同時に、コミュニケーション能力向上の機会とする

【教育班】

仮説①:「日本の最北端 稚内には、若者が働ける十分な環境がないのではないか」(文責・石原響)

稚内市は過疎化が進み、人口減少と共に若者の定着が難しい状況が続いている。国勢調査結果(※1)によれば、稚内市の人口は1990年代以降、顕著に減少しており、2010年には38,945人、2024年には30,520人となっている。生産年齢人口(15~64歳)は著しく減少しており、特に若年者人口(15歳から29歳)は、大幅な減少となっている。これらは、令和3年に策定された「稚内市過疎地域持続的発展市町村計画」(※2)によると、主に水産業の衰退を引き起こした200海里漁業専管水域の設定や、産業構造の転換が遅れたことに起因しているとのことであった。さらに、稚内市の産業構造を見てみると、第一次産業(特に漁業)の従事者数は減少し、第三次産業への依存が高まっている。長い年月をかけて、漁業の衰退とともに、若者の就業先としての選択肢が限られ、都市部への流出が続いている。加えて、都市圏に比べて社会基盤や生活インフラの整備が遅れていることも、若者の定住を阻む要因となっているだろう。特に、稚内市では新型コロナウイルスの影響を受け、デジタル化の遅れが浮き彫りになり、リモートワークやオンラインの利用機会に対する地域の準備不足が課題となっている。(※3)このような状況の中で、若者が稚内に魅力を感じ、定着し続けるためには、働きやすい環境を整える必要があるのではないだろうか。

(※1) 稚内市「稚内市統計書(平成22年度~令和6年度年度)」

<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/shisei/tokei/tokeisyo/>

(※2) 稚内市「稚内市過疎地域持続的発展市町村計画(令和3年度~令和7年度)」

<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/files/00015700/00015739/kasokeikaku.pdf>

(※3) 経済産業省「北海道稚内市基本計画」

https://www.meti.go.jp/policy/sme_chiiki/miraitoushi/kihonkeikaku/honbun/459_hokkaido_wakkanai_honbun.pdf

【概要】

インタビューの日時、場所

- ・北海道稚内高等学校 8/19 10:30~12:00
- ・稚内大谷高等学校 8/20 13:00~14:30 8/22 12:00~12:30
- ・稚内市立稚内東中学校 8/25 12:30~13:30

話を聞いた人、場所の特徴、経歴

・北海道稚内高等学校

1923年に北海道庁立稚内中学校として開校し、2023年度に創立100周年を迎えた。1950年には稚内女子高等学校と統合され、2011年には北海道稚内商工高等学校と再編統合されている。学科は、普通科、商業科、衛生看護科で構成されており、2019年度から普通科および商業科に単位制が導入され、学科・教科横断型の柔軟なカリキュラムが編成されている。衛生看護科では、2年間の専攻科を含む5年一貫教育を実施しており、看護師国家試験受験資格を取得可能である。

・稚内大谷高等学校

1963年(昭和38年)に設立された私立高等学校で、北海道稚内市に所在する。日本国内の私立高校としては最北端に位置し、宗谷管内で唯一の私立高校である。仏教の精神を基調とした「全人教育」を建学の理念とし、「世の光明となる人格の養成」を目指している。この理念のもと、学力だけでなく、人間性や社会性を重視した教育を展開している。「文理専攻」と「地域探究専攻」の2つのコースが設置されており、文理専攻では、大学進学を視野に入れた学力向上に注力しており、少人数制のクラス編成を導入。随時面談を実施することで、一人ひとりの生活や学習状況を的確に把握し、個別最適な指導を行っている。また、将来の進路実現に直結する“出口教育”を意識したカリキュラムが特徴で、質の高い進学指導体制が整っている。地域探究専攻では、社会人としての基礎力を身につけるため、「総合的な探究の時間(地域課題探究)」を通じて、卒業までに6単位を履修する。地域連携を重視しており、地元企業の協力を得ながら学びを深める体制が構築されている。2年次からは、生徒の興味・関心に応じて履修科目の一部選択制を導入し、個別性の高い学びを実現している

・稚内市立稚内東中学校

1970年(昭和45年)に当時の声間中学校・恵北中学校・更喜苦内中学校の3校と、稚内南中学校の一部が統合して設立された公立中学校である。所在地は北海道稚内市潮見5丁目。地域では「東中(とんちゅう)」の通称で親しまれている。開校以来、地域の変遷とともに発展を続け、昭和58年には潮見が丘中学校の新設に伴い一部が分離、平成25年には新校舎が落成している。令和2年度には開校50周年を迎え、これまでに7,000人を超える卒業生を輩出しており、卒業生は道内外を問わず、各分野で活躍している。

教育の根幹には「融和創造」の校訓が掲げられており、心豊かで自立した生徒の育成を目標に掲げている。文化的な校風を持ち、特に伝統的に力を入れている合唱活動は学校の特色として定着しており、地域内外から高く評価されている。毎年10月に開催される合唱祭には、地域住民も来場し、生徒の活動を支えている。

【アンケート、インタビューの目的・狙い】

本調査は、「稚内には若者が働ける十分な環境がないのではないか」という仮説をもとに実施したものである。

この仮説を検証するため、稚内市内の中学校・高等学校に通う生徒を対象に、将来の進路に関するアンケートを行い、あわせてその保護者にも同様の内容についてアンケートを実施した。また、各学校の教員に対しても、生徒の進路に関するヒアリングを行った。

【アンケートの形式】

生徒および保護者に対しては、Google FormのQRコードを記載した依頼文書を事前に各学校を通して送付し、オンライン形式でアンケートを実施した。

【アンケート内容と調査結果】

1. 生徒向けアンケート:「稚内の中高生が考える将来の展望」

- 回答結果では、約半数の生徒が「将来は稚内市外(道内・道外を含む)で働きたい」と回答した。
- 約3割の生徒は「将来も稚内で働きたい」と回答し、残る約2割は「未定」としている。

2. 保護者向けアンケート:「保護者が考えるご子息の進路」

- 回答した保護者の約8割が「稚内市内でも市外でもどちらでもよい」と答え、その理由の多くは「本人に決めてほしい」というものであった。
- 残りの約2割は、「家業を継いでほしい」「市外で経験を積んでから戻ってきてほしい」など、稚内に残ること・稚内を出ることのいずれかを希望する回答があった。

【分かったこと】

1. 市外志向の生徒が半数を占める
稚内市の中高生のおよそ半数が「将来は稚内市外で働きたい」と回答している。主な理由は、「希望する職業が稚内では実現できない」「暮らしにくさを感じる」などであった。就職先の選択肢や生活環境に課題を感じている様子が見える。
2. 一定数の生徒が地元で定着を希望している
約3割の生徒は「稚内に残りたい」と回答しており、その理由として「家業を継ぐ」「地元のほうが安心する」「親の近くにいたい」など、家庭や地域とのつながりを重視する傾向が見られた。
3. 進路が未定の生徒は約2割
「未定」と回答した生徒は約2割にのぼる。主な理由として、「稚内に何の仕事があるのか分からない」「自分が何をしたいか決まっていない」など、将来に対する具体的なイメージを持っていない状況がある。
4. 保護者の多くは子どもの意思を尊重
保護者の約8割が「稚内市内でも市外でもどちらでもよい」と回答しており、その理由の多くは「本人に決めてほしい」というものだった。稚内に残ってほしい、または外で経験を積んでほしいとする意見も見られたが、少数にとどまった。

【考察】

今回の調査結果から、稚内市における若者の進路選択には、地域の就労環境や生活条件、将来に対する情報の不足といった複数の要因が影響していることが読み取れる。

まず、生徒の約半数が「稚内市外で働きたい」と回答した背景には、自身の希望する職業が地域内で実現できないという、職業選択の幅の狭さがある。稚内市は地理的な条件から、産業構造が限定されやすく、専門職や新しい分野の仕事が少ないことが、若者の都市部志向を促していると考えられる。また、「暮らしにくさ」という回答も見られたことから、生活インフラや文化的・教育的資源の不足も要因の一つとみられる。

一方で、約3割の生徒が地元での就職を希望しており、その理由に「家業を継ぐ」「安心感がある」などの地域への愛着や家庭環境への配慮が挙げられている。このことは、必ずしもすべての若者が都市部を志向しているわけではなく、地元に残ることに意義を見出している層も一定数存在することを示している。

「未定」と回答した生徒が約2割にのぼったことも注目すべき点である。彼らの多くは、自身の将来像や稚内で可能な仕事についての情報を十分に持っておらず、将来に対する「解像度の低さ」が選択の停滞につながっている可能性がある。これは、キャリア教育や地域の産業情報の提供が不十分であることの表れとも解釈できる。

また、保護者の多くが「進路は本人に任せる」と回答していることから、家庭の進路決定における影響力は限定的であり、若者が自ら将来を考え、決定していく力がより求められていることがうかがえる。一方で、保護者の一部からは「家業を継いでほしい」「外で経験を積ませたい」など、地域への定着や外部との接続を重視する声も見られた。

以上を総合すると、若者が稚内で将来の選択肢を広げ、主体的に進路を選べるようにするためには、以下のような施策が求められると考えられる。

- 稚内で可能な職業や働き方についての情報提供の強化
- 地元企業と教育機関との連携による職業体験・探究活動の充実
- 地域課題に関わる探究学習を通じた地元への関心と理解の促進
- ICTやリモートワーク等を活用した新しい働き方のモデル提示
- 家庭・学校・地域社会が連携したキャリア支援体制の整備

これらを通じて、若者が地元の可能性を見出すと同時に、市外での経験も価値あるものと捉えられるような「選べる未来」を提示していくことが、今後の稚内の人材育成・定着に向けた重要な課題である。

【インタビューの形式】

各学校の一室をお借りし、B班2名で聞き取りを行った。

【インタビュー内容と調査結果】

1. 北海道稚内高等学校 教員

北海道稚内市という地理的・構造的な制約の中で、稚内高校では進学・就職ともに都市部志向が強まっている。進学先は札幌など道内が中心で、道外進学は比較的少ない。一方で、地元での高卒就職は選択肢が限られ、就職希望者も多くない。

生徒の多くは、高校入試の実質的な競争が存在しないことから、学習習慣や受験に対する自覚が不足しており、将来設計の解像度も低い。進学先や職業の選択も、十分な情報がない中で、宣伝や周囲の意見に流されて決める傾向がある。

このような状況に対し、学校側では面談や学習記録の提出、オープンキャンパスや合同企業説明会への参加を促すなど、意欲形成と情報提供の両面から支援を行っている。また、校長は「高校が地域にあることそのものが意味を持つ」として、地域の魅力を再発見し、学校を中心としたまちづくりの必要性を強調している。

2. 稚内大谷高等学校 教員

進学を選んだ生徒のUターンを促す取り組みを重視している。

また、地域に公立高校が1校しかないことから、学力に課題を抱える生徒が一定数おり、学習習慣の定着が難しいという声もあった。そのため、少人数クラスによる「寺子屋的な指導」や定期的な面談によって、一人ひとりに寄り添った進路支援が行われている。

経済的支援も充実しており、進学コースの生徒には大学見学や資格試験のための交通費支援、奨学金、通学支援、さらにはUターン就職者への住居費補助など、多角的にサポートしている。

教育面では、私立ならではの自由度を活かし、進学に向けた独自のカリキュラムや、生徒の主体的な部活動立ち上げ支援も行っている。教員不足の中、外部講師や遠隔授業も活用しているが、「すべてをオンラインにすると高校の意味が薄れる」という懸念も示されていた。

今後については、生徒数が減少していく中でも、稚内に2校ある高校のうちの1つとして、選択肢を残すために学校の存続を重視していく方針が示された。

3. 稚内市立稚内東中学校 教員

稚内東中学校では、地域に根ざした教育活動が行われており、特に「平和学習」や地域の祭りへの参加（御神輿担ぎなど）を通じた地域とのつながりが重視されている。学校創立以来、地域密着の校風が根付いており、「東中（とんちゅう）」の愛称で親しまれている。

生徒の多くは、卒業後に市内の高校（稚内高校または大谷高校）へ進学するケースが主流で、市外進学は少ない。部活動を通じて外に出る生徒はいるものの、基本的には地元志向が強い。

生徒の特徴としては、宗谷管内で他の地域との交流が比較的多い一方で、外との競争や進路選択の幅が狭く、情報不足や進路への解像度の低さも課題として挙げられている。

進路指導においては、総合学習を通じて地域について学ぶ機会を3年間にわたって設けており、地元への愛着を育てながらも、外へ出て経験を積み、再び地元に戻って貢献するという「循環型」の進路観を理想として掲げている。

【分かったこと】

1. 北海道稚内高等学校

- 都市部への進学は多いが、地元就職やUターンは限定的。
- 地元での就職先が少なく、選択肢として見えにくい。
- 生徒は将来や進路に対する解像度が低く、学習習慣や競争意識の希薄さが課題。
- 情報の断絶があり、進学先や職業についての判断材料が不足している。
- 教職員は、生徒の主体的な進路選択を促すための環境整備に力を入れている。
- 地域に高校があること自体が、若者の定着や地域活性化にとって重要な拠点となっている。

2. 稚内大谷高等学校

- 大谷高校は地元定着型の教育と進学支援の両立を目指している。
- 地域に根ざした教育体制を整えながら、進学・就職の幅を広げる工夫がされている。
- 教育資源の限界を補うために、オンラインや外部講師の活用が進んでいる。

3. 稚内市立稚内東中学校

- 地元への進学率が非常に高く、地域との結びつきも強い。
- 地域資源や人とのつながりが教育資源として活用されている。
- 一方で、競争環境の希薄さや生活環境の課題も見られる。

【考察】

今回の一連のインタビューを通じて浮かび上がってきたのは、地理的・構造的な制約の中で形成される稚内の進路観と教育環境である。稚内市の高校、中学校の教員それぞれの視点から現状と課題を多角的に見ることで、稚内という地域の教育と進路選択における独特な状況が見えてきた。

まず注目すべきは、情報環境の隔絶である。高校や中学の教員からは一貫して、都市部と比べて「外の情報が届きにくい」という問題が指摘された。進学先の選択肢が限られがちであり、専門学校への進学が「刷り込まれている」といった表現にも見られるように、生徒が十分な比較検討を経ずに進路を選んでしまう傾向がある。オープンキャンパスや企業説明会へのアクセスが困難であることも、進路に対する視野を狭めている。

さらに、競争の欠如と学習習慣の未定着という点も共通の課題として挙げられていた。定員割れの状態が続く高校入試において、受験に対する危機感が希薄であり、学力の伸長に直結しにくい。これは稚内高校・大谷高校の両校で見られる傾向で、教員たちは「勉強ができる体力をつける」「学びの振り返りを習慣化する」など、学習意欲を育てる取り組みを地道に行っていた。こうした状況からは、地方における“選抜の機能”の形骸化と、それによる教育的モチベーションの低下という構造的な問題も垣間見える。

一方で、各校が独自に工夫を凝らしている点も見逃せない。たとえば大谷高校では、少人数編成のクラスで生徒一人ひとりに対して丁寧な進路指導を行っており、大学見学や検定費用の補助など経済的なハードルにも対応している。さらに、Uターン就職者に対して住宅費を補助するなど、卒業後の“帰ってくる選択肢”を可視化する取り組みも行われている。

稚内高校でも、1年生の段階から学習記録を取らせたり、進路に向けたスケジュール提示を行ったりと、自立を促す教育を重視していた。両校とも「進路を自分で決める」「将来稚内を選ぶ」という生徒主体の選択を理想としており、行政や学校が一方的に決める(トップダウン)よりも、生徒自身が情報を得て、自ら選び取る(ボトムアップ)形での地域回帰を目指している点で共通している。

中学校レベルでは、地域とのつながりを重視した教育が根づいている。特に稚内東中学校では、地域の祭りや総合的な学習の時間を活用して、生徒が地元を学ぶ機会を体系的に提供して

いる。しかし、その一方で、進路選択における“外との比較”が十分に行われていないことも課題であり、これは高校進学後の進路形成の精度にも影響を与えている。

また、教員不足や教育インフラの脆弱さも、稚内地域全体の教育課題として共有されていた。遠隔授業の試みや外部講師の導入などによって補完されてはいるが、「オンラインに頼りすぎると高校に通う意味がなくなる」といった懸念から、教育の質と存在意義のバランスを模索している様子がうかがえた。

全体として、「出ていくこと」自体を否定せず、「戻ってくること」に意味を見出す地域循環型の人材育成が模索されていた。現時点では、進学や就職を機に稚内を離れる若者が多いものの、各教育機関はその先にあるUターンや地域貢献を見据えて、持続可能な地域人材の育成に取り組んでいる。

このような地域規模の課題は、稚内に限らず地方都市全般に共通するものでもある。今後は、教育機関・地域社会・行政が連携しながら、情報格差の解消、学力の底上げ、そして地域に戻る魅力の創出に向けた施策を打ち出していく必要があるだろう。

【アクションプラン】

稚内市でできる、「新しい仕事の形」を提供する

【課題】

現在、稚内市では若者の人口流出が続いており、特に高校卒業後に進学や就職で一度市外に出た若者が、地元に戻らないケースが多くなっている。これに対して、稚内市ではUターン・Iターン・Jターンを促す取り組みがなされているが、現実的にIターン・Jターン（他の地域出身者の移住）はハードルが高く、大きな成果にはつながらないものと思われる。

一方で、稚内出身の若者には「地元への安心感」や「家族とのつながり」など、地域への愛着を持つ声が多く聞かれた。したがって、最も効果的で現実的な施策は、「Uターンの促進」であると考えられる。

「稚内に戻ってきたときに、自分らしく働ける場所があるのかどうか」ということに焦点をおき、稚内に戻ることに現実味を感じられる「新しい仕事の形」を地域に用意することが必要である。

【概要】

Uターンを前提とした新しい働き方を稚内につくるために、次の3つを柱にしたアクションプランを実施する。

1. 都市部企業と連携した「リモートワーク型仕事体験プログラム」
高校生やUターン希望者に向けて、都市部の企業とつないだリモートインターンや業務委託を体験できるプログラムを整備。
2. 地元の空き施設を活用した「コワーキング拠点」の整備
地域内にリモートワークや小規模起業が可能なスペースを確保し、Wi-Fi・会議環境などを整備。Uターン後も自分のスキルを活かして働ける場を用意する。
3. 高校での「探究型キャリア教育プログラム」の導入
高校生の段階から地元にある多様なキャリアに触れ、地元での暮らしや働き方にリアリティを持てるような探究学習を導入する。

【期待される効果】

- 稚内にルーツをもつ若者が、地元への帰属意識を保ちながら進学・就職し、将来的に稚内へ戻ってくる「Uターン」の流れを太くする。
- 地元に戻ってきた際に「働ける場所がない」という障壁を取り除き、自分のスキルや経験を地元で活かせる土壌を育てる。
- 単に雇用を増やすのではなく、「働き方そのものの選択肢」を増やすことで、地域内に多様なライフスタイルを根づかせる。
- 高校生の段階から「地元でもこういう働き方がある」という具体的なイメージを持たせることで、将来的なUターンのモチベーションにつながる。

仮説② 稚内市は子育てしにくい街なのではないか (文責・清水美衣奈)

出生数は2000年の384人から比べると2024年では112人となり1/3まで減少している。この大幅な減少は、若年層の流出や子育て世代の減少などを反映しており、子育て環境の課題が背景にある可能性が考えられる。したがって、出生数の推移から見ると、稚内は子育てしにくい街であるのではないかという仮説が立てられた。

参考文献:総務省 国勢調査及び国立社会保障・人口問題研究所 将来推計人口、総務省 住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数

しかし、数字だけでは子育ての実際の状況や保護者の感じ方までは分からない。そこで、この仮説を検証するために、実際に稚内で子育てをしている保護者の方々にインタビューを行い、日々の生活や子育て環境に関する意見を伺うことにした。

【概要】

取材相手:稚内で子育てをしている(していた)お母様

インタビュー形式:街頭インタビュー

インタビューの目的:子育て環境や教育環境についてのリアルな声を集めるため

【分かったこと】

稚内で子育てをしている保護者へのインタビューから、同市には子育てを支えるさまざまな要素が存在することが明らかになった。まず、地域全体で子どもを大切にする意識が根付いており、親同士や地域住民が互いに支え合う文化が強いことがわかる。具体的には、学童保育や子育て支援センターなどの制度が整備され、急な子どもの体調不良や一時的な預かりにも対応可能であり、保護者が安心して仕事や家庭生活を両立できる環境がある。また、給食費の補助や医療費助成など、経済的支援も充実していることが確認された。

さらに、保護者間のつながりも強く、情報交換や遊びのサポート、日常的な相談が活発に行われている。地域住民の協力により、子どもが遊ぶ場や習い事の活動にも支援が届きやすい構造と

なっている。安全面においても、治安の良さや顔の見える関係性が、子どもを安心して外で遊ばせられる環境を支えている。加えて、自然環境が豊かであることも特徴であり、海や川、公園などの身近な自然を利用した四季折々の体験が可能で、子どもがのびのびと成長できる環境が整っている。

一方で、課題としては、遊び場や医療機関、買い物の選択肢が限られているため、移動に時間がかかることや、都市部に比べて多様な習い事の機会が少ないことが指摘された。しかし、これらの制約も地域住民の協力や制度の工夫によりある程度補われている。

【考察】

当初の仮説では、稚内市は出生数の減少に伴い、子育てしにくい街ではないかと考えられていた。しかし、保護者インタビューを通じて、稚内市はむしろ子育てしやすい街であることが明らかになった。少人数地域ならではの利点として、保護者同士や地域住民との密な関係性が形成され、子育てに関する情報や支援を得やすい環境が整っていることが大きい。また、学童や支援センター、医療・教育制度の整備によって、緊急時や日常的な子育ての負担が軽減されており、安心して子どもを育てられる基盤がある。

さらに、自然環境を活かした体験や遊びが身近にあることは、子どもにとって成長に不可欠な豊かな経験を提供している。治安の良さや顔の見える関係性も、親が安心して子育てできる大きな要素である。このことから、人口減少や都市的利便性の低さといった課題はあるものの、稚内市は地域の協力、教育・子育て支援、自然環境、安全性といった複数の要素が重なり、結果的に子育てしやすい街として機能していると言える。

保護者インタビューにより、稚内市は少人数地域ならではの親密なコミュニティや充実した子育て支援制度、豊かな自然環境が整っており、結果として「子育てしやすい街」であることが明らかとなった。これまでの仮説では、出生数の減少や都市的利便性の低さから、子育て環境は必ずしも恵まれていないのではないかと考えられていた。しかし、実際に保護者の声を聞くことで、地域の協力体制や制度・環境の利点が優先され、子育ての安心感や充実感に直結していることが確認できた。

この発見を踏まえ、次に小学校や中学校での教育現場の実態を調査することで、子どもが日常的にどのような環境で学び・遊び・成長しているかをより具体的に理解することが可能となる。学校インタビューでは、保護者が感じている子育てしやすさが教育現場にも反映されているか、また、子どもたちの学習や生活、地域との関わりがどのように形成されているかを検証することができる。このように、保護者の視点と学校の視点を重ねることで、稚内市における子育て環境の総合的な評価が可能になる。

これらを学校でのインタビューにおける目的とする。

○小学校

・稚内中央小学校

【概要】

日時:8月22日 14時～16時30分

場所:稚内中央小学校

取材相手:校長 川原修子先生

【分かったこと】

今回、稚内市立中央小学校の校長先生にインタビューを行った結果、地域に根ざした教育や子育て環境に関して多くの特徴が明らかになった。まず、教育活動においては、ソーラン踊りやスキー、カーリングといった地域性を活かした授業を実施しており、気候や文化を教育に直接反映させている点が特徴的である。冬季には校庭に雪山を作り、そり遊びやスキー練習を行うなど、厳しい気候を学びや遊びの一部として取り込む姿勢が見られた。

また、児童数が少ないことによる利点も確認された。校長先生自身が全児童の名前や特徴を把握できるほど規模が小さいため、一人ひとりに目を配った丁寧な対応が可能となっている。子どもと教職員との距離が近く、温かい関係性が築かれていることがうかがえた。

一方で、稚内特有の気候は子どもの生活にも影響を与えている。強風のため低学年は傘の使用が禁止されるなど、登下校や屋外活動に制約が生じている。しかし、そうした厳しい自然条件も教育活動の一部として工夫されている点が特徴である。

子どもたちの特徴については、都市部と比較して学力面では高い水準にはないとされる一方で、時間や競争に追われない環境が子どもをおおらかでのんびりとした気質に育てている。また、魚に詳しいなど特定の分野に強い関心を示す児童も多く、個性が生まれやすい環境であることが示された。さらに、小規模であるがゆえにリーダー経験を得やすく、主体性を育む土壌が整っている点も特徴的であった。

課題としては、友人の家が遠く、気軽に遊びに行けないといった地理的制約が挙げられた。また、「市民ぐるみの子育て運動」の担い手が高齢化しており、若い世代への継承が必要であることも明らかとなった。加えて、保護者自身が「稚内は子育てしやすい環境である」という認識を十分に持っていない点も指摘された。

家庭や地域との関わりについては、保護者が参観日や学校行事に積極的に参加しており、中央小祭りでは出店に協力するなど学校活動を支えていることがわかった。地域住民も朝の見回りや子どもたちの学習活動に協力しており、学校が地域の中で中心的な役割を果たしていることが確認された。さらに、保護者と学校との距離は近く、相談が寄せられることも多い。その内容の多くは子どもの人間関係に関するものであり、学校が保護者にとって大きな支えとなっていることがうかがえた。

最後に、学校として大切にしていることについて、校長先生は「平和」の重視を挙げられた。稚内は国境に位置する街であり「平和都市宣言」を行っていることから、平和教育に力を入れている。また、「市民ぐるみの子育て運動」の盛り上がり低下している現状を踏まえ、今後はその運動を再び活性化させたいという強い思いが示された。

【考察】

稚内中央小学校の教育は、地域性を最大限に活かしたモデルであるといえる。文化的にはソーラン踊りを、自然環境としては積雪や強風を教育に取り込み、地域の特徴を子どもの学びに転換している点は非常にユニークである。都市部では実現しにくい「地域に根ざした教育」を体現している事例といえるだろう。

また、少人数教育の環境は、児童一人ひとりに寄り添うきめ細かさを可能にし、個性や主体性を伸ばす土壌となっている。都市部のように子どもが「その他の存在」として埋もれてしまうのではなく、誰もがリーダー経験を得られる点は、地方教育の大きな利点である。学力面では課題が残るものの、それ以上に「おおらかさ」や「個性の発揮」といった側面が子どもの強みになっている。

さらに、学校と家庭、地域のつながりの強さも注目すべき点である。保護者や地域住民が学校行事や子どもの安全に積極的に関与し、困ったときには学校を頼る文化がある。この「学校を地域の中心としたコミュニティ形成」は、都市部では希薄になりつつあるものであり、稚内の教育の大きな特徴といえる。

一方で、課題も存在する。友達の家が遠く遊びに行きにくいという地理的制約は、子どもの生活体験を制限している。また、子育て運動の担い手不足や保護者の意識の低さは、地域全体の教育環境を弱体化させかねない。今後は若い世代の巻き込みと、地域の強みの再認識が不可欠である。

総じて、稚内中央小学校は「地域性を活かした教育」「少人数教育の利点」「学校・地域・家庭の密接な連携」という三つの強みを持ちながら、人口減少や子育て運動の継承といった課題を抱えている。これらの取り組みと課題の両面を捉えることで、地方教育のあり方を考える上で重要な示唆を与えてくれる事例である。

・宗谷小学校

【概要】

日時:8月27日8時30分～9時

場所:移動中の車の中

取材相手:校長 塩原千夏先生

【分かったこと】

最北端の漁師の子どもが多い小学校では、地域や自然の特色を生かした独自の教育活動が展開されていることが明らかになった。磯遊びや海の生き物の観察、宗谷海なり太鼓の発表、小学校内に設置された水族館の活動などは、海と共に暮らす地域ならではの学びの形である。親である漁師が水族館に生き物を提供するなど、地域の人々とのつながりも教育に組み込まれている。

運動会では一般的な競技に加え、地域の人も楽しめる種目や幼児向け競技が取り入れられ、学校行事が地域交流の場としても機能している。児童数が少ないことによって、一人ひとりに目が

行き届き、全員が活躍できる機会が確保され、学年を越えた縦割りの関わりも自然に生まれている。

一方で、児童数の少なさは「関わる人や職業の幅が狭く、視野が広がりにくい」といった課題も生じている。クラス替えがないため人間関係が固定化し、子どもにとって負担になることもある。また、地域的に習い事や活動の選択肢が少なく、子育て世代にとって制約となる場面もある。

保護者の学校への関わりは積極的で、PTA活動や学校行事の運営、環境整備などに協力している。地域の祭りや町内会の活動も学校と連携しており、子どもたちの育ちを地域全体で支えている。保護者からは「行事をもっと増やしてほしい」という声も寄せられている。学校は家庭の状況を把握しながら情報提供やサポートを行うことで、子育て世代を支える存在となっている。

校長は「子どもたちには人を思いやる心を育て、たくましく自分の人生を切り拓く力を身につけてほしい」と語り、今後は地域全体で子育てを盛り上げることの重要性を強調していた。

【考察】

この小学校の教育は、地域資源を最大限に活用することで、児童数の少なさや地理的制約を補い、むしろ強みとして教育に生かしている点が特徴的である。海や漁業に密着した学習活動は、子どもに地域への誇りやアイデンティティを育むと同時に、地域住民との結びつきを強化している。児童数が少ないことで、教師が個々の特性や状況を把握しやすく、全員が活動に参加できる機会が増える点も教育の大きな利点である。

しかしながら、少人数教育ゆえに「世界が狭く、職業や価値観の多様性に触れる機会が少ない」といった課題も明確である。子どもたちが視野を広げるためには、外部講師や地域外のプログラムを導入するなど、学校や地域だけでは補えない経験を積む仕組みが必要である。

子育て環境に関しては、保護者が学校活動に積極的に参加できる文化や地域住民との連携が充実しており、都市部に比べて家庭・地域・学校が密接に連携した「地域ぐるみの子育て」が実現されていることが大きな強みである。しかし、習い事や余暇活動の選択肢が限られていること、地域の人口構造や地理的制約により保護者の負担が増えることは、今後改善の余地がある課題である。

総合的に見て、この小学校は「地域性を活かした教育」「少人数ゆえの個別対応」「学校・家庭・地域の密接な連携」という三つの強みを持ちながら、「視野の狭さ」や「活動の選択肢の限界」といった課題も抱えている。地域全体で子育てを盛り上げる仕組みを強化することが、子どもたちの健全な成長と地域教育の持続性にとって重要である。

○中学校

・稚内東中学校

【概要】

日時: 13時10分～13時30分

場所: 校長室

取材相手: 進路指導の先生

【分かったこと】

稚内東中学校では、独自の教育活動として平和学習が行われている。具体的には、鶴を折るなどの活動を通じて平和について考える授業があり、地域や社会に関心を持つ機会が設けられている。また、総合的な学習の時間を通じて、地域の課題や文化について学ぶ授業も行われており、子どもたちは地域に関わる意識を育む機会が与えられている。

子どもたちの特徴としては、稚内市内の他地域の中学生と比べても、人とのつながりを持つ機会が多く、コミュニケーション能力が高い点が挙げられる。一方で、外部との競争機会が少ないことは課題として指摘されており、学力面や経験の多様性において制約がある可能性がある。

保護者の子育て環境については、道外出身者から見ると、病院や遊び場、買い物施設が少なく不便さを感じるが、稚内出身の保護者にとっては日常的に受け入れられる環境であり、地域性に応じた認識の違いがあることがわかった。学校としては、PTA活動や夏祭りなどの地域行事への参加を通じて、保護者や地域住民と協力しながら子育て環境の支援を行っている。御神輿を担ぐ活動など、地域との密接なつながりを維持する仕組みも存在する。

校長や進路指導の先生の視点では、稚内で子どもたちが育つ上で重要なのは「地域に根差した学び」と「地域貢献の意識」であり、地域のつながりを強化することで、孤立を防ぎ、困ったときに助け合える子どもを育てたいと考えていることが明らかになった。

【考察】

稚内東中学校の教育活動は、地域の特色と連動して子どもたちの人間力や社会性を育むことに重点が置かれている。平和学習や地域学習を通じて、子どもたちは自分の住む地域に関心を持ち、地域社会に貢献する意識を養うことができる点は、都市部の中学校にはあまり見られない特徴である。

また、学校行事やPTA活動を通じて保護者や地域住民が教育に積極的に関わることで、地域全体で子育てを支える文化が形成されている。これにより、子どもたちは孤立することなく育つことができ、コミュニケーション能力や協調性を自然に身につけることが可能となっている。

一方で、外部との競争が少ないことは学力面や進路選択の幅に影響を与える可能性がある。今後の課題としては、地域密着型の強みを維持しつつ、外部との交流や学習の多様性を取り入れ、子どもたちがより広い世界を知る機会を増やすことが重要である。また、道外出身者にとって不便な医療や買い物、遊び場の少なさを補う施策も検討することで、子育て環境全体の充実につながる。

総合的に見ると、稚内東中学校は「地域性を生かした教育」「地域との連携」「地域に根ざした子育て支援」という三つの柱で成り立っており、地域の特色を活かした教育・子育て環境のモデルとして評価できる。ただし、外部との接点を増やす取り組みを行うことで、子どもたちの可能性をさらに広げられると考えられる。

アンケート(Googleフォーム)

これまでのインタビューで、保護者や学校教員の視点から稚内市の子育て環境や子どもたちの特徴を把握してきた。しかし、インタビューだけでは限られた人数の意見しか知ることができない。そこで、大人数の回答を集め、幅広い視点から学校生活や子育て環境の実態をより具体的に把握するためにGoogleフォームによるアンケートを行った。

○中央小学校の子供がいる先生方

【結果】

稚内で子育てしていて良かった点としては、

- ・医療費の助成(高校生まで無料)
- ・未就学児や学童の受け入れ先が複数あり、選択肢があること
- ・地域行事や子どものためのイベントが残っていること
- ・少年団などの活動の選択肢が多く、友達がつくりやすいこと
- ・街の機能がコンパクトで、買い物や通園が便利なこと
- ・治安の良さや涼しい気候

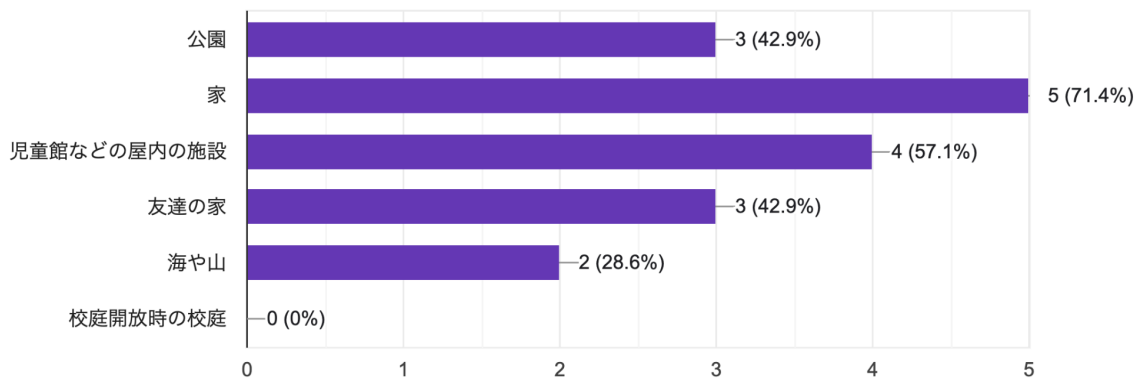
などが挙げられた。

逆に不便な点・課題については、

- ・医療面では、専門的な通院先が遠い、乳幼児医療費助成に所得制限がある、病院が少なく待ち時間が長いなどの不便さがある。
- ・遊びや学習環境では、遊び場所や遊具が少ない、冬は公園が立ち入り禁止になる、塾やスポーツ用品店が少ない、小さな文化施設は年齢が上がると物足りなくなる、学習用具の種類が少ない、学習環境の空気が弱いといった声がある。
- ・働く親にとっては、子どもを長時間預けられる施設がもっとあると助かるという要望も挙がった。

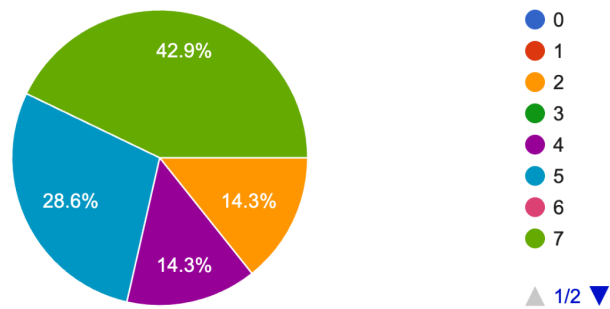
普段お子様はどのような場所で遊んでいますか。（全て選んでください。）

7件の回答



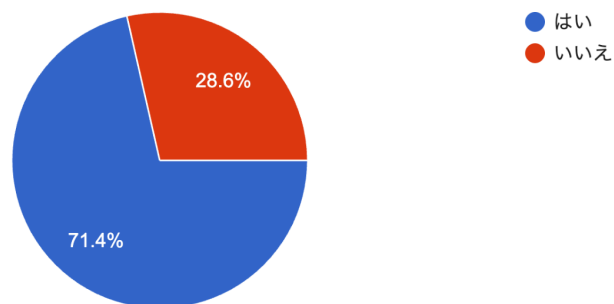
稚内での遊び場の満足度を教えてください。（0がとても不満、10がとても満足）

7件の回答



利用している（していた）子育て支援制度はありますか。

7件の回答



利用している(していた)子育て支援制度

ファミサポ、乳幼児医療受給、医療費の補助、ランドセル登録、ジュニアスポーツクラブ、学童、療育

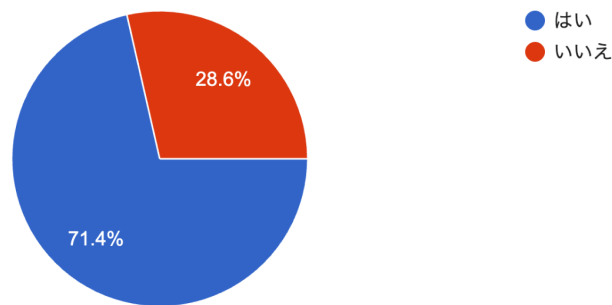
が挙げられた。

希望する支援制度に関しては、

- ・既存制度で十分と感じている意見:2件
- ・学習や部活動に関する支援:学校以外の学習支援、スポーツ少年団や部活の送迎支援、遠征費の補助、送迎負担軽減のためのバス手段の確保
- ・発達・子育て支援:発達や子育てに関する公的相談窓口の充実、療育の場の拡充
- ・金銭的支援:経済的負担の軽減を希望

親同士のつながりがありますか？

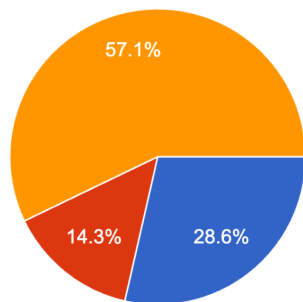
7件の回答



親同士のつながりを感じる場面(5件の回答より)

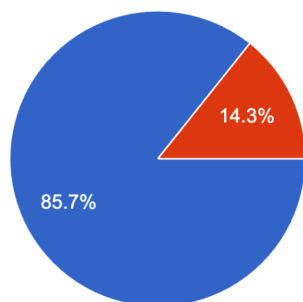
- ・学校関連の情報交換や気分転換の際に、他の保護者とのつながりを実感
- ・放課後の遊びや部活動の送迎の協力を通じて助け合いの関係が生まれる
- ・子育ての喜びや悩みを共有する場面で、共感や支えを感じる
- ・子どもの行動や日常の情報を互いに伝え合うことで、つながりを実感
- ・困ったときに相談できる頼れる人の存在を通じて、支え合いの関係があることを確認

生活に必要な買い物は、身近なところで足りていますか。
7件の回答



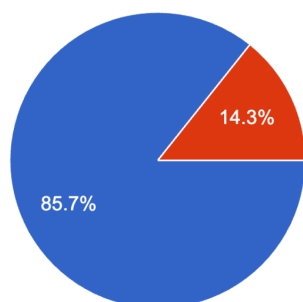
- はい
- いいえ
- どちらともいえない
- 選択肢 4

稚内で行われている「子育て運動」を知っていますか。
7件の回答



- はい
- いいえ

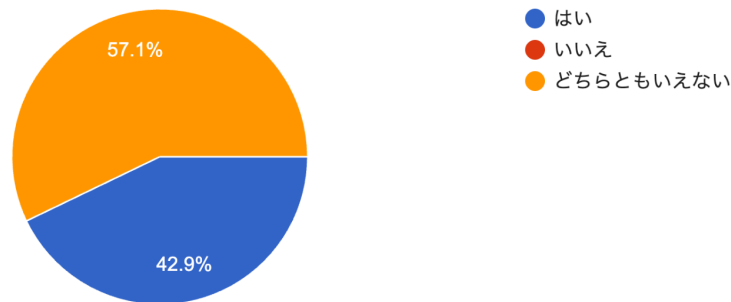
このまま稚内で子育てを続けていきたいですか。
7件の回答



- はい
- いいえ

全体的に稚内は子育てしやすい街だと思いますか。

7件の回答



稚内での子育てに関する意見(4件の回答より)

・支援体制への評価: 個性的な子どもを育てていても、支援体制がしっかりしているため安心できる

・子育て運動の現状: 子育て運動は素晴らしい取り組みと評価されているが、世代交代が進んでおらず、コロナ禍で人のつながりが希薄になったことが課題

・主体性の重要性: 子育てやまちづくりにおいて、誰かに任せるのではなく、保護者自身が主体的に運動を引き継ぎ盛り上げていく必要がある

・制度・機関の連携への希望: 医療・児童相談・保健センター・保育機関・教育機関を横断的に連携させるシステムがあればさらに助かる

【わかったこと】

稚内での子育てについて、多くの保護者からは街の機能がコンパクトにまとまっており、未就学児の受け入れ先や通園助成などの制度が整っていること、医療費が高校生まで無料であること、治安の良さや涼しい気候など、生活のしやすさが大きな利点として挙げられた。また、少年団や学童、地域のイベントなど、子どもが関わる活動の機会が比較的多く、親同士のつながりもあり、送迎や情報交換、子育ての悩みの共有などで助け合える環境があることも評価されている。

一方で、専門的な医療機関が少なく距離があることや、遊び場や学習環境が限られていること、塾や文化施設、スポーツ用品店など教育・文化に関する選択肢が少ないことが不便さとして指摘された。

子育て支援制度の利用状況を見ると、回答者の71%が何らかの支援制度を利用しており、特にファミリー・サポート、医療費補助、学童利用が多い一方で、「もっとこういう支援が欲しい」との問いには、「思いつかない」「特になし」と答える人も一定数存在した。ただし、具体的な要望としては部活動や少年団の送迎支援、遠征費の補助、療育や相談の場の充実、発達支援や金銭的援助などが挙がっていた。

さらに、子育て運動については85%の人が知っており、同じく85%が「このまま稚内での子育てを続けていきたい」と回答している。「稚内は子育てしやすい街か」という問いに対しては57%が「どちらとも言えない」と答えたものの、「いいえ」と答えた人はおらず、否定的意見はほとんど見られなかった。

【考察】

アンケートの結果から、稚内は制度面や生活環境において子育てしやすい特徴を持つ街であるといえる。特に、医療費助成や学童の利用、ファミサポなどの制度の浸透度が高いことや、地域行事や親同士のつながりが残っていることは、安心して子育てを続けられる大きな理由となっている。

ただし「どちらとも言えない」と答えた人が過半数を占めたことは注目すべきであり、これは「不便さ」や「選択肢の少なさ」といった制約が一定の不満につながっていることを示唆している。特に、医療や学習環境、スポーツ・文化活動の選択肢不足は、子育て世帯にとって将来的な不安要因となる可能性がある。

また、「支援制度に新たに望むものが特に思いつかない」という声も多く見られたが、これは逆に言えば、すでに現在の制度が基本的なニーズを満たしていることを意味していると考えられる。一方で、「療育の場がもっと欲しい」「送迎や遠征費の負担が重い」といった具体的な課題も見られたため、今後は支援の“量”よりも“質”や“きめ細やかさ”の改善が必要だと考えられる。

子育て運動に関しては、認知度も高く、理念そのものは支持されている。しかし一部から「世代交代がうまくいっていない」「コロナ禍でつながりが薄れている」という懸念も寄せられており、今後は若い世代が主体的に関わり、地域・家庭・学校・行政が連携して再活性化していく必要がある。

総じて、稚内は制度・環境面では「子育てしやすい街」といえるが、医療・学習・活動機会の制約という課題を解決し、さらに子育て運動を次世代につなぐ仕組みを整えることが、今後の子育て環境の持続的な向上につながると考えられる。

○中央小学校の保護者の方

【結果】

稚内で子育てしてよかった点

医療費が無料または負担が少ない

- ・高校生まで医療費負担がない
- ・市立病院でのお産や医療対応が手厚い
- ・保健師のサポートが親身

行政・子育て支援制度が充実している

- ・幼児教室や子ども向けイベントが豊富
- ・遊び場や施設を無料・低料金で利用可能
- ・生活費・教育費の助成制度がある

自然環境が豊かで安心して育てられる

- ・海や山が近く、四季の変化を感じられる
- ・車が少なく安全に外遊びができる
- ・自然と都市機能が程よくバランス

学校や地域の規模・つながりが子育てに好影響

- ・少人数で先生が全ての子どもや保護者の顔を把握

- ・地域住民や祖父母など、子育てのサポートが身近にある
- ・地域イベントや交流の機会が豊富

生活のしやすさ

- ・街の機能がコンパクトで買い物や移動が便利
- ・のんびりと落ち着いた雰囲気子どもを育てられる
- ・子どもと向き合う時間を確保しやすい

稚内で子育てするうえでの不便な点

医療・病院に関する不便

- ・専門的な治療や大きな病院へのアクセスが困難で、旭川や札幌まで行く必要がある
- ・個人病院が少なく、診療時間が短い(午前中のみなど)ため、受診のタイミングが限られる
- ・待ち時間が長く、こども向けの受診が不便

遊び・子ども向け施設の不足

- ・遊び場や公園が少なく、特に高学年向けの遊び場が限られる
- ・文化・学習体験施設も少なく、習い事やイベントの選択肢が限られる
- ・遠征や活動の移動が長距離かつ費用がかかる(少年団など)

教育・学習の面での制約

- ・大手の塾がなく、全国や全道での自分の学力位置を把握しづらい
- ・進学先や学習の選択肢が少ない

生活・街の利便性に関する不便

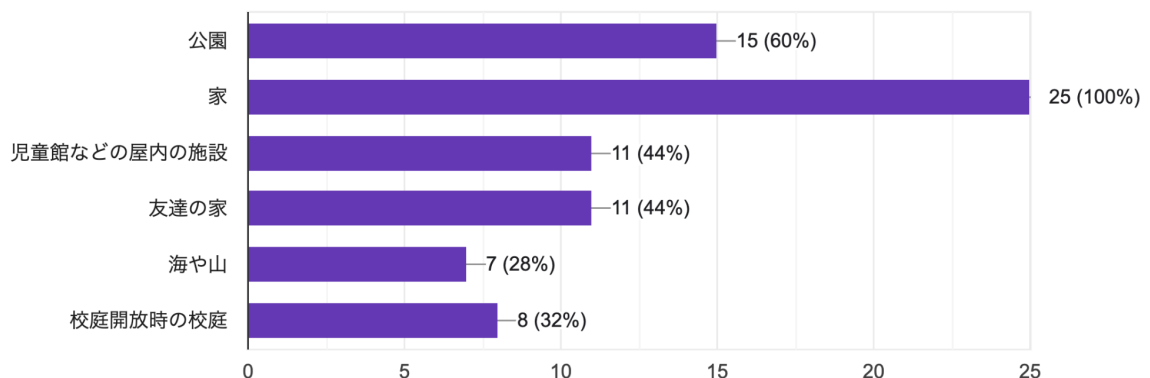
- ・買い物や日常サービスの店が少なく、都市部までの距離が遠い
- ・子どもを預けられる施設が少ない
- ・スポーツ用品や必要な道具を揃えにくい

その他

稀に、税金の無駄遣いで大人向け施設が優先されていると感じる声もある

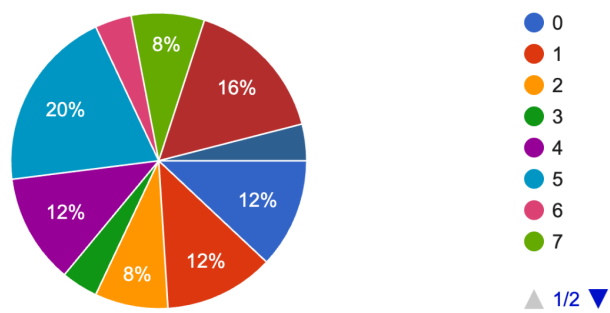
普段お子様はどのような場所で遊んでいますか。(全て選んでください。)

25件の回答



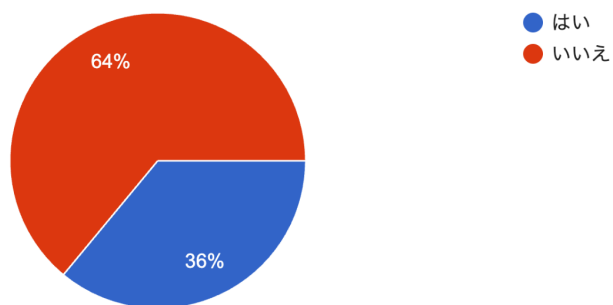
稚内での遊び場の満足度を教えてください。(0がとても不満、10がとても満足)

25件の回答



利用している（していた）子育て支援制度はありますか。

25件の回答



子育て支援制度の利用状況

25名の保護者の回答を見ると、子育て支援制度を「利用している」と答えた方は一部に限られ、多くの回答者は「特に利用していない」「なし」と回答しています。具体的に利用している制度として挙げられたのは以下の通りである：

- ・ファミリーサポート
- ・子育て支援センターやつどいの広場の利用
- ・学童保育
- ・医療費の無償化(子ども医療費助成)
- ・幼稚園の預かり保育
- ・児童手当、児童扶養手当
- ・どさんこ子育て特典制度

希望している支援制度

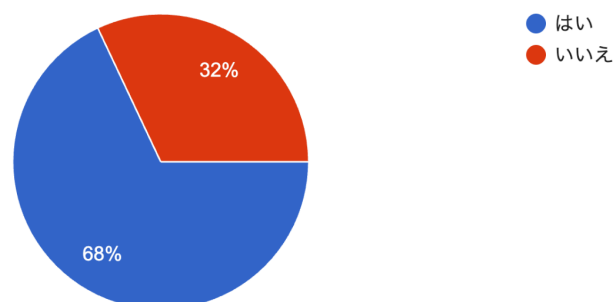
多くの回答者は現状の支援に満足しているが、一部改善や追加を望む声がある
「特になし」「特にない」「充実している」と回答した人も多く、現行の子育て支援制度に概ね満足している傾向がある。

改善や追加を望む具体的な要望

- 1.医療・健康関連
 - ・病院の増設や専門的医療施設の充実
 - ・午後診療の増加
 - ・インフルエンザワクチンなど予防接種の補助
- 2.教育・学習関連
 - ・学費の無償化(大学・子ども全般)
 - ・学習支援や体験型イベントの充実
 - ・高学年向けの学習・遊び施設の拡充
- 3.預かり・託児関連
 - ・託児所や子どもを預かる制度の充実
 - ・共働き世帯のための短時間預かりや臨時預かり
- 4.生活支援・経済的支援
 - ・旅行や給食の補助金
 - ・現金給付型の支援(物価高への対応)
 - ・移動手段やバス通学への補助
- 5.スポーツ・レクリエーション
 - ・スポーツ少年団や高学年向け遊び場の支援

親同士のつながりがありますか？

25件の回答



親同士のつながりを感じる場面・状況

情報交換の場としてのつながり

- ・学校行事や街のイベントと一緒に参加したとき
- ・子どもの学校での出来事や進学、育児について意見交換や相談をするとき
- ・持ち物や生活上の疑問点について連絡を取り合うとき

子育て・生活支援としてのつながり

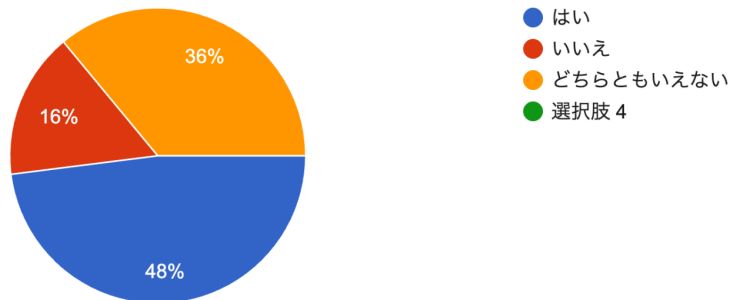
- ・困ったことがあれば助け合ったり、相談したりするとき
- ・放課後や習い事での送迎、預かりの調整時
- ・子どもの家での様子や日常生活について話すとき

子どもを介したつながり

- ・子ども同士が仲良く遊ぶ親同士で交流する
- ・少年団や習い事の集まりで顔を合わせる

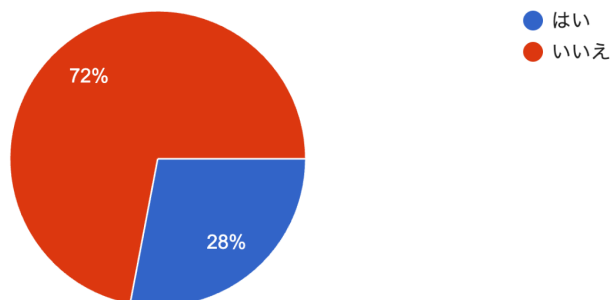
生活に必要な買い物は、身近なところで足りてますか。

25件の回答



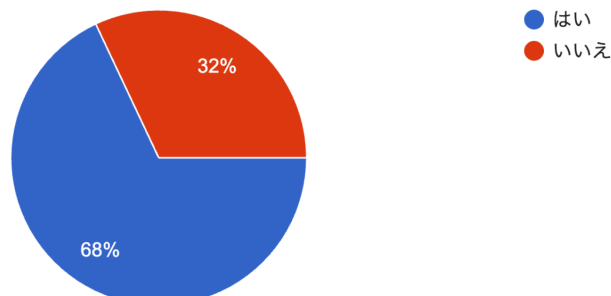
稚内で行われている「子育て運動」を知っていますか。

25件の回答



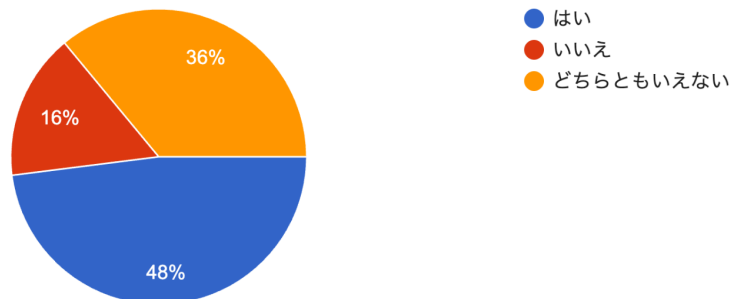
このまま稚内で子育てを続けていきたいですか。

25件の回答



全体的に稚内は子育てしやすい街だと思いますか。

25件の回答



稚内での子育てに関する意見まとめ

良い点・評価

- ・小学校の先生が熱心で、一生懸命子どもに向き合っている
- ・地元の自然環境が豊かで、子どもがのびのびと育てられる
- ・親同士や学校と保護者が協力し、地域ぐるみで子育てを支えたいという意識がある

課題・改善希望

遊び場の不足

- ・高学年向けの遊び場が少なく、家でゲームをする時間が長くなってしま
- ・公園の遊具やトイレの改善が望まれる(明るく子どもが使いやすい環境)

学校・教育の課題

- ・高校の選択肢が少ないため、学習環境や進路のために札幌などへ進学する子どもが多い
- ・発達障害児や不登校の子どもへの支援体制をさらに充実させる必要がある

医療・専門施設の不足

- ・専門的な治療は札幌など大都市まで行かないと受けられないことがある

地域ぐるみでの支援

- ・学級や学年全体で子どもを育てる考え方を広め、助け合える地域を作ることが望ましい

子ども向けイベントの増加

- ・自然が豊かな環境を活かした遊びや体験の機会をさらに増やしてほしい

【分かったこと】

小学校の保護者の回答から、稚内での子育てする上での利点として、生活や教育環境の利便性が高く評価されていることが分かった。医療費が高校生まで無料で、保健師や市立病院のサポートが手厚く、安心して子どもを育てられると感じる保護者が多い。また、自然が豊かで、海や山が近く、四季がはっきりしていることから、子どもをのびのび育てられる環境が整っているという声も多く挙げられる。さらに、少人数校で先生が子どもや保護者の顔を把握できることや、地域の子育てイベント、低料金の遊び場、親同士の交流の機会が充実しており、地域のつながりや支えを感じながら子育てできることも特徴的である。

一方で、課題としては、専門的な医療機関や習い事、塾、文化施設の数が少なく、都心部へのアクセスが必要になることが指摘されている。遊び場や公園はあるものの、高学年向けの施設や遊具が不足しているため、室内遊びやゲームの時間が長くなりがちである。また、高校や進学先の選択肢が限られ、生活に必要な買い物の選択肢も少ないことから、利便性には一定の制約があることが分かった。子育て支援制度の利用率は一定数あるものの、認知度や利用可能な範囲には偏りが見られ、地域全体での支援体制の認知向上が課題とされている。

【考察】

これらの結果から、稚内は自然環境や医療・教育制度、地域コミュニティの支えにより、安心して子育てできる環境であることが示されている。しかし、専門的医療や習い事、文化体験の不足、高学年向けの遊び場の限界などは、子どもが多様な体験をする機会を制約しており、都市部との距離による負担も大きいことが課題である。また、高校や進学先の選択肢が限られることで、進学や就職に伴う地域流出が発生する可能性も考えられる。

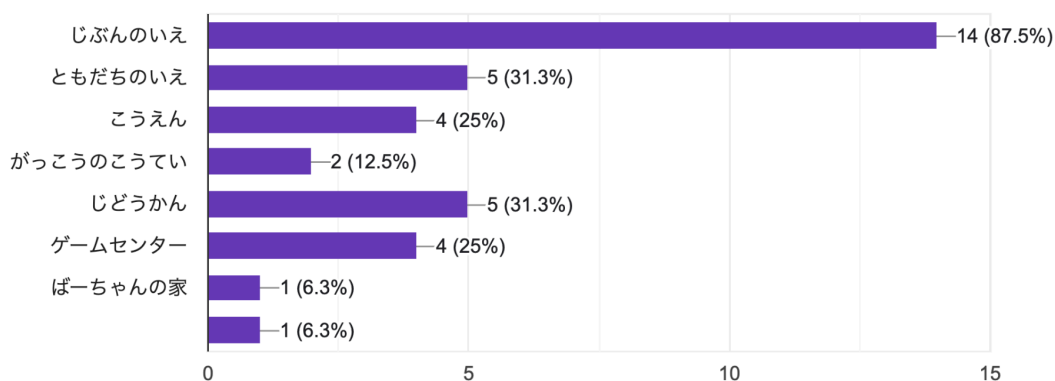
保護者の意見からは、地域全体で子どもを育てる意識や支援の充実が求められていることが読み取れる。特に、放課後支援や不登校・発達障害の子どもへの対応、遊具や施設の充実、子ども向けイベントの拡充など、地域・学校・家庭が連携して取り組む施策があれば、より安心して多様な子育て環境を整えることが可能である。また、子育て支援制度の周知や利用促進も重要であり、既存の制度を最大限活用できる仕組み作りが求められると考えられる。

○中央小学校生徒(3年生)

【結果】

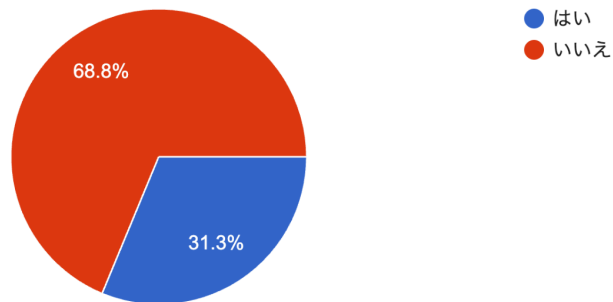
いつもはどこであそぶことがおおいですか？（あてはまるものすべてをえらんでください）

16件の回答



ちいきのひとやきんじょのひととおはなしすることはありますか？

16件の回答



稚内にほしいもの

商業施設・店舗

- ・イオン(圧倒的多数で最も多い要望)
- ・ドン・キホーテ
- ・ラウンドワン
- ・コストコ、ロピア、ゼビオ、無印良品

飲食店・コンビニ

- ・ケンタッキー
- ・サーティーワンアイスクリーム
- ・セブンイレブン、ファミリーマート
- ・みそきん

娯楽・レジャー施設

- ・バッティングセンター・ピッチングセンター
- ・大型動物園

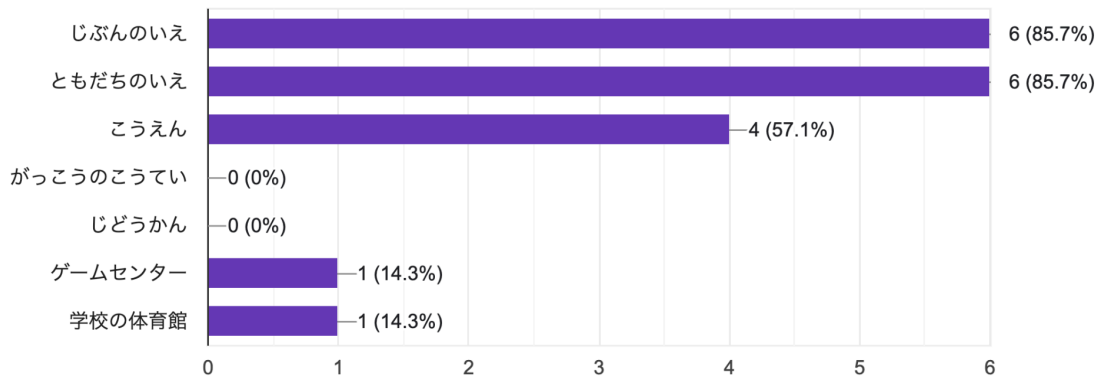
その他

・人が増えてほしい(人口増加への期待)

○宗谷小学校

いつもはどこであそぶことがおおいですか？（あてはまるものすべてをえらんでください）

7件の回答



よくやる遊び

外遊び

- ・野球、キャッチボール、フリスビー
- ・缶蹴り、鬼ごっこ
- ・チョーク石を使った遊び

室内・デジタル遊び

- ・ゲーム(Switch・スプラトゥーン3)
- ・YouTube視聴
- ・友達と話す

習い事

現在やっている習い事・部活

- ・水泳、ダンス
- ・英語

過去にやっていた習い事

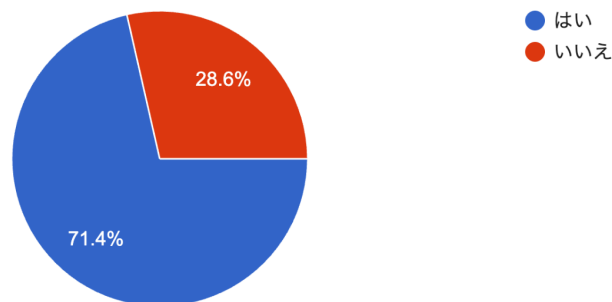
- ・水泳
- ・ピアノ
- ・英語

やっていない

1名

ちいきのひとやきんじょのひととおはなしすることはありますか？

7件の回答



稚内の好きなところ

・人の優しさ・地域性

「地域の人が優しい」「周りの人たちが優しいときがある」など、回答の多くが「人の温かさ」を挙げている。

・安心・安全な環境

「静か」「物騒じゃない」といった、落ち着いて安心して暮らせる点。

・食や行事

「ホタ亭という美味しいラーメン屋がある」「ご飯が美味しい」など食に関する魅力。

「小さいけど行事が多い」といった、地域の行事を楽しめる点。

稚内の嫌いな点

・勉強に関する不満

・人間関係の問題

・不満が特にない:4名

稚内にほしいもの

スポーツ関連:「借りれる野球場」「水夢館(プール施設)」「射的」

商業施設:「スシロー、ユニクロ、大きいイオン」「近くにコンビニ」

文化・娯楽施設:「ライブやイベントができる場所」

特になし:1名

【わかったこと】

アンケートの結果から、子どもたちの遊び方は「家や友達の家でゲームをする」といった室内遊びが中心であり、外遊びや地域の施設を利用した活動は少ないことが分かった。また、地域の人との交流については学校によって差が見られ、中央小では多くの子が「地域の人と話さない」と答えたのに対し、宗谷小では「話す」と答えた子が多数を占めていた。この違いは学校や地域ごとの環境の影響を受けている可能性がある。さらに、まちの魅力としては「静かで安心できる」「人が優しい」「ご飯がおいしい」「行事が多い」といった声が多く寄せられ、地域の安心感や温かさが子どもたちにとって肯定的に受け止められていることが確認できた。一方で、「勉強が嫌い」「いじめがある」「なにもない」といった不満や課題も示されており、特に学校生活や娯楽面に不満を感じる子どもが存在していることも明らかとなった。また、稚内に欲しいものとして「イオンやラウンドワン、ドンキホーテ、ケンタッキー、ユニクロ」などの都市型商業施設や、「野球場」「ライブやイベ

ントができる場所」といった娯楽・活動拠点が挙げられており、都市的な利便性や子どもが楽しめる環境へのニーズが強く表れていた。

【考察】

これらの結果から、稚内の小学生にとって地域は「静かで安心でき、人が優しい」という生活基盤としての魅力が強く評価されている一方で、子ども自身が積極的に楽しめる体験や居場所が不足していることが浮き彫りとなった。遊びの中心が室内に偏っていることは、屋外での安全な遊び場や交流できる環境が少ないことを示唆している。また、中央小と宗谷小で地域住民との交流度合いに差があった点は、学校ごとの地域連携の取り組みや住民活動の盛んさが影響していると考えられる。交流の多い地域では「人の優しさ」がより実感されやすく、逆に交流が少ない地域では地域の温かさを体験する機会が限られている可能性がある。さらに、子どもたちが「大型商業施設」「文化・娯楽施設」を望んでいることは、地域での生活が安心であるにもかかわらず、日常の選択肢や楽しみの幅が狭いと感じていることの表れである。総じて、稚内のまちは「安心できる生活の場」としての強みを持ちながらも、「子どもの遊びや居場所の充実」「学校生活の環境改善」「都市的利便性の補完」といった課題を抱えていると考えられる。



アンケートの結果から、稚内の子どもたちは「地域の人優しい」と感じている一方で、実際に地域の人と交流する機会は限られていることが分かった。特に、中央小では多くの子が「地域の人と話さない」と回答しており、宗谷小と比べても交流の少なさが目立っている。つまり、地域の温かさがあるにもかかわらず、それを子どもたちが体感できる場が十分に存在していないことが課題として浮かび上がった。

そこで、私たちは「お祭り以外でも地域の人と子どもが交流できる場づくり」が必要だと考えた。

【アクションプラン】

この課題を踏まえ、子どもと地域の人とが日常的に関われる機会を増やすために、次の二つの取り組みを提案する。

第一に、街の清掃ボランティア活動に子どもたちが参加できる仕組みを整える。地域の人と一緒に街をきれいにすることで、子どもたちは地域への愛着を育み、世代を超えた交流が自然に生まれると考えられる。

第二に、昔遊び体験会の開催である。けん玉やベーゴマといった昔ながらの遊びを通じて、地域の高齢者や大人と子どもが交流できる場を設けることで、文化の継承と世代間のつながりが促進される。

これらのアクションプランについて詳しく説明する。

1.清掃ボランティアについて

まず、子どもたちが地域にある既存の清掃ボランティア活動に参加する機会を設ける。地域住民と一緒に活動することで、普段は交流の少ない大人たちと関わりを持つことができ、地域の一員である意識を育むことが期待できる。

加えて、学校主催で独自に清掃活動を企画し、その広報を生徒自身が担う仕組みを導入する。具体的には、地域探求の授業の一環として生徒がチラシを作成し、学校周辺のお店を訪ねて掲示を依頼する。その際にお店の方にインタビューを行い、仕事の内容や地域での役割について学ぶことで、清掃活動の宣伝と同時に、地元の職業を知る学習の機会にもなる。

この取り組みは、単なる清掃活動にとどまらず、①地域の人との交流、②地元の職業理解、③子ども自身による発信力の育成を兼ね備えたものとなる。結果的に、地域と子どもが双方向に関わり合い、つながりを深めていくきっかけとなることが期待される。

2. 昔遊び体験会について

これは地域の高齢者や保護者の方に学校へ来てもらい、子どもたちと一緒に昔ながらの遊び（けん玉、こま回し、お手玉など）を体験する活動である。

わざわざ学校に地域の人を招く理由は、地域のイベント会場などに生徒が自主的に足を運ぶ形式だと、参加する子どもに限られてしまい、十分な交流の機会にならない恐れがあるためである。学校に来てもらうことで、普段授業や学校生活の延長として全員が参加でき、確実に地域の人と触れ合える場をつくることができる。

この体験会を通して、子どもたちは地域の人と直接交流しながら遊びを楽しむだけでなく、世代を超えたつながりを実感できる。また、地域の大人にとっても「自分の知っている遊びを子どもたちに伝える」ことが生きがいにつながり、地域全体の絆を強める契機になると考えられる。

これらの活動を通して、子どもたちが地域に根ざした学びと交流を得ると同時に、「地域ぐるみで子どもを育てる街」としての稚内の魅力をさらに高めることができるだろう。

【医療班】

・仮説の詳細と、仮説立案に至った経緯（文責：鈴木実由）

仮説：医師を増やすには、「医師が来なくなる街づくり」が重要ではないか

厚生労働省が令和6年に発表した「医師偏在指標」(※1)によると、稚内市を含む宗谷二次医療圏の医師偏在指標は全国で最下位から数えて3番目である。さらに過去の発表では、最下位にランクインする年もあった。この地域の深刻な医師不足の現状がうかがえた。

また、稚内市の人口の推移をみると、減少の一途をたどっており、平成29年には35000人を超えていた人口は、令和7年、ついに30000人を切った。(※2)

この人口減の理由の一つに、市からの流出の多さが挙げられると思う。市が令和5年に行った「まちづくりに関するアンケート調査～市民意識調査～」(※3)では、「これからも稚内に住み続けたいですか」という問いに対し、住民の28.4%が「できれば転出したい」または「転出する予定がある」と答えている。特に、そう答えた人が、20代では42.1%、さらに30代では49.1%にのぼっている。また、続いて転出したい理由について問うと、「医療・福祉サービスに不安があるため」が1位となっている。

さらに、育英館大学さんが作成した市立病院の医師の勤務状況に関するYouTubeを拝見したところ、(※4)7年前の動画ではあるが、36時間勤務をしているようすを目の当たりにし、大きな衝撃を受けた。稚内市の医療体制の逼迫がうかがえた。

これらの点について、私たちは、市民が満足できるような充実した医療環境を提供できないのは、医師不足により医師の負担が大きすぎるためだと考えた。そのため、医師を増やすための行動が不可欠だと感じた。

一方で、医師偏在指標が過去の最下位という数字から多少の改善を見せている点については、市の医師誘致の取組が大きく功を奏しているためだろうと思う。市立稚内病院の積極的な研

修医誘致(※5)、行政による開業医誘致制度(※6)、市民による「医療と健康のまちづくり応援団」(※7)などが挙げられる。

そこで、「医師を増やすためには、医師が来なくなる街づくりが大切ではないか」という仮説をたて、これらの活動を参考に新たなアクションプランの立案を目指すことにした。

※1 厚生労働省「医師偏在指標・計算式」

<https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000665196.pdf>

※2 稚内市「稚内市の人口」

<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/files/00004700/00004776/20250801172335.pdf>

※3 稚内市「まちづくりに関するアンケート調査～市民意識調査～報告書」

<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/files/00018000/00018079/20240724190456.pdf>

※4 育英館大学「地域医療は、地域が守る。～市立稚内病院と地域住民の挑戦～」

<https://www.youtube.com/watch?v=c3zL6R0ZKqk>

※5 稚内市「市立稚内病院経営強化プラン」

<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/files/00001000/00001064/20240405145711.pdf>

※6 稚内市「開業医誘致」

<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/fukushi/kenkoiryo/kaiqyoyuchi/>

※7 稚内市「医療と健康のまちづくり応援団 行動計画」

<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/files/00011600/00011656/koudoukeikaku.pdf>

【各訪問先の調査結果と学び】

■市立稚内病院長 國枝保幸先生(文責:鈴木実由)

【概要】

日時: 8/20 14時～14時45分

場所: 市立稚内病院

経歴:

市立稚内病院の院長。28年前に初めて来稚し、その後固定医として勤務したのち、12年前から院長を務める。就任2年目に最初の研修医がきた。

インタビューの目的:

稚内の医療の中核を担う市立稚内病院の院長である國枝先生に、「医師不足の現状について」「研修医誘致について」「応援団との連携について」の3つの点についてお話をうかがった。研修医誘致に対する努力や病院と市民との関わりについての見識を深め、「医師が来たくなる街づくり」の重要性を検討するうえで参考にすることを目的とした。

インタビューの実施形式:

市立稚内病院の一室をお借りし、A班2名、B班4名、学生ファシリテーターの計7名で聞き取りを行った。

【分かったこと】

1. 医師不足について

かつて市立稚内病院の医師の数が22人まで減ったことがあったが、今は研修医10人を含む40人以上の医師が勤務している。循環器、泌尿器、麻酔科に関しては、一度はなくなったものの復活した。地方病院の中で、医師が増えているのは大変珍しいことである。研修を稚内で行い、一度別の場所で専攻を学んだのち、稚内に固定してくれた人などがいる。

ただ、それでも医師の数は十分ではなく、負担は決して小さくなっていない。それにより、病院内「医療相談室」には不信案、特に「待ち時間が長い」「医師の態度が悪い」といった意見が多く届いている。

2. 研修医誘致について

研修医がやりたいことを積極的に聞き、応えるようにしている。また、希望者は礼文島や宮古島に地域医療研修に赴けるプログラムもある。研修医誘致について、特別なことはなにもしていないが、人数が少ないため1対1で研修を行うことができる。それに伴い、挿管などの対応も早い段階から行えて、早くから技術の習得ができる。環境が人を育てている。

今は喜ばしいことに、研修医募集の枠を超えるほどの応募があり、落としている状況。本当は枠を設けずに希望者の数だけ来てほしいというのが本音。

3. 応援団との連携について

「ぬくもりの木」の活動はたいへんありがたい。今の現場でも医療不信はあるが、前よりは減っている。医師は仕事であまり褒められることがないので、患者さんからの感謝のメッセージは大きな励みとなっている。応援団は存在するだけでありがたい。

4. 稚内の街について

健康意識は、この地域の人は希薄かもしれない。最近イベントを催せていないが、案内に来てくれる人は非常に多いそう。

先生自身は稚内の街がすごく好き。周りの医師には稚内の豊かな自然を生かせる趣味を持つ方が多くいる。この町は来たら好きになれると思う。

5. 外国人の受診について

ベトナムとインドネシアの方が多い。勤務先の上司に連れてこられることが多い。何とか会話は成り立っており、困っている姿はあまり見ない。

熱や風邪のほか、糖尿病で受診される方もいる。

【考察】

市民の医療に対する不信感の根底には、医師の負担が大きすぎる現状があると考えた。だから、医師の負担を減らすことを目標にアクションプランを考えていく方針を立てた。

また、研修医誘致に関しては、思いのほか充足していることを知った。応援団との関わりから、市民と医療の距離を近づけることの重要性を感じたことも含め、医師を誘致するような「制度」を開拓するより、市民にスポットライトを当てるべきだと感じた。

■道北勤労者医療協会 平間信雄室長(文責:鈴木実由)

【概要】

日時: 8/20 15時30分～16時30分

場所: 宗谷医院

経歴:

昭和47年に抜海小教諭となり、それから36年にわたり教育環境の向上、教職員の指導・育成に尽力。退職後は教育相談所長などを務め、さまざまな教育課題の解決に力を注いできた。現在は道北勤労者医療協会の室長を務める。

(稚内プレス「市勢発展に寄与 稚内市 5氏に対し市政功労」)

<https://wakkanaiexpress.com/2019/09/26/41209/> 最終閲覧:2025/09/24)

インタビューの目的:

長年稚内に住まれてきた平間さんに対して、医療者ではない「市民」という視点から稚内の医療や市民の健康意識についてうかがうことで、それらについての解像度を上げ、理解を深めることを目的とした。

インタビューの実施形式:

宗谷医院の待合室にて、A班5名、B班6名、学生ファシリテーターの計12名で聞き取りを行った。A班が主にインタビューを行ったのち、B班からいくつか質問させていただいた。

【分かったこと】

ここでは、B班が行ったインタビュー内容のみ記す。

1. 稚内市民の健康意識について

医師が少ない分、「病気になるれない」という危機意識は都会よりも多いように感じる。そういう意味では、自己管理能力は高いかもしれないが、調査をしたことはない。

医師の講演を受けたとき、それまで健康は医者次第だと思っていたが、自分で気を付けなければいけないものだという自覚が芽生えた。

医療者の存在そのものや、医療者と関わる機会をもつことは、それだけで健康になれる気がする。

健康への関心はあるが、最近イベントが減ってきている。人材不足のなかで、できることを模索して未来に挑戦をしていきたい。

【考察】

市民と医療者が交流することの重要性を強く感じさせられた。8/19の市長表敬の際、市長が「市民が医師の指示に従うだけの受動的な医療ではなく、市民が健康に自ら気をつかう、能動的な医療を目指したい」というお話をされていたことが思い返された。

市民としても、そうしたい意識、そうしなければならないという意識はあるものの、どのように行動すればよいのか、その具体的なビジョンが不透明な様子であった。

人材が不足する中で、どのように人材を活用して医療者と市民のかけはしを作るかという課題が生まれ、結果として看護学生の参入案へとつながった。

■医師誘致応援団長 山田繁春さん(文責:鈴木理子)

【概要】

日時: 8/21 10時～11時

場所: 保健福祉センター

経歴:

北海道開発庁(現・国土交通省)の開発建設部に勤務後、43歳で市議会議員に就任。議員在職中に、市立病院の慢性的な赤字や医療スタッフ不足といった地域医療の課題に直面し、医療と福祉が自治体運営の根幹であることを認識する。その解決に向け、医師誘致団を発足させるなど地域医療の充実に尽力してきた。現在77歳。

インタビューの目的:

医師誘致応援団長を務める山田氏に対し、開業医誘致制度制定に至る経緯や、クリニックはぐ伊坂院長の誘致に至る経過、さらに稚内市における医師誘致に対する思いなどについて聞き取りを行った。これにより、「医師を増やすためには、医師が来なくなる街づくりが重要である」という仮説を検証することを目的とした。

インタビューの実施形式:

保健福祉センターの一室をお借りし、A班B班全員で聞き取りを行った。

【分かったこと】

1. 開業医誘致条例の成立経緯

平成18年、山田氏が市議会議員時代に施行。背景には、市立病院の人材不足や赤字、外来患者の過多(当時1日約1200人)、入院患者との不釣り合い、診断回転率の悪さ、人手不足、市民

の「ちょっとした病気でも総合病院へ行く」という大病院志向などがあつた。これらの課題を改善するために開業医誘致を提案。初めて提案してから成立までに約10年を要した。途中で諦めかけた時期もあつたが、市長交代がきっかけで成立に至つた。

2.「医療と健康の街づくり応援団」について

平成28年に発足。山田氏は医師誘致応援団長に就任。活動内容は、開業の可能性がありそうな医師(市立病院の研修医や総合診療に関心のある医師など)に直接会うことや、医療従事者が働きやすい「雰囲気づくり」をすること。特に「市民の医療従事者に対する雰囲気を良くすること」に力を入れており、他の応援団と協力しながら活動している。

3. 伊坂先生(クリニックはぐ)誘致の経緯

伊坂先生の妻が偶然稚内出身の看護師・助産師で、妻の母親と山田氏が町内会活動を通じて知り合い、「娘婿が医師」という話を聞いた。地域のお祭りを通じて伊坂先生と出会い、将来開業希望があると知って誘致を考えるようになった。富岡町に市民主体で開業医用の土地が確保されていたことも重なり、話がまとまった。

4. 開業医と市立病院の役割分担・機能分化

誘致後は開業医と市立病院の連携が良好になった。特に伊坂先生を誘致した際には、市立病院とのパイプを繋ぐ役割も担い、開業医と病院の協力体制が強化された。稚内の開業医と市立病院の連携の良さは全国的にも珍しいレベルにあると評価している。

5. 開業医誘致の限界と今後

現状の稚内市は人口に対して開業医数は逼迫していないため、稚内市と同様に開業医に対し助成金を出している他自治体との競争の必要性は低い。優先すべきは開業医よりも市立病院の医師確保である。

6. 市民の健康意識について

医師の負担軽減には、市民一人ひとりの健康意識の向上が不可欠である。稚内でも保健センターを中心に健康教育に取り組んでいるが、特に話を聞いてほしい人ほど参加しないという課題がある。行政の介入よりも、市民自身の意識と主体的な取り組みが重要であり、市民会議などの役割が期待される。

【考察】

山田氏のお話から、市立稚内病院の逼迫した状況を改善するために開業医誘致条例が制定されたこと、またその制度や町全体での雰囲気づくりによって開業医が増え、市立病院との連携が強化されたことがわかった。さらに現在、稚内市の人口に対して開業医の数はさほど不足しておらず、開業医誘致の優先順位は、市立病院の医師確保と比べると低い位置づけであることも明らかになった。

また、國枝先生からは「研修医の募集は多く、落選が出るほどである」という現状を伺い、山田氏からは「開業医の数は逼迫していない」というお話を伺った。これらを踏まえると、稚内市における医師数確保の取り組みは一定程度充足しているのではないかと考えられる。一方で、開業医誘致には資金や土地の確保といった課題が伴い、学生である私たちが直接介入できる部分は少ないと感じた。

そこで私たちは、あらためて「なぜ医師を増やす必要があるのか」という問いに立ち返った。その目的は、医師の負担を減らすことである。負担軽減の方法は「医師を増やす」だけでなく、「患者

数を減らす」ことによっても達成できると考えられる。國枝先生や山田氏から、市民の健康意識や主体的な取り組みが十分とはいえない現状を伺ったことから、私たちは、市民一人ひとりが健康に関心を持ち、自ら管理できるようにする「ヘルスプロモーション」への働きかけに、学生として介入できる部分があるのではないかと考えるようになった。

■クリニックはぐ院長 伊坂雅行先生(文責:鈴木理子)

【概要】

日時: 8/21 13時～15時

場所: 保健福祉センター

経歴:

埼玉県出身。独協医科大学附属高等学校を卒業後、愛知医科大学に進学し、小児医療に約20年間従事。名古屋にてNICUで未熟児医療に携わる。その後、北里大学および名古屋市立大学に籍を置き、北里大学ではNICUの責任者を務めた。北里大学勤務時代、職場環境の変化などにより退職を考えていた折、山田繁春氏から稚内での開業の誘いを受け、約13年前に開業を決意。稚内市の「開業医誘致制度」を活用し、制度を利用した2例目の開業医となった。その後も地域医療に尽力し、稚内市医師会に所属。5年前の新型コロナウイルス感染症流行時には医師会の委員長に就任し、保健福祉センターでの予防接種に従事するなど、市民の健康を守る活動を継続している。

インタビューの目的:

伊坂先生は、山田氏の呼びかけにより稚内市の開業医誘致制度を活用して実際に開業した医師である。そこで、誘致した側である山田氏のみならず、誘致された側である伊坂先生の視点からも聞き取りを行った。具体的には、稚内で開業するまでの経緯、稚内で開業してみて感じたこと、稚内の医療の現状に対する認識、市民の健康意識に関する所感などについて、医師としての立場からの意見を伺った。これにより、「医師を増やすためには、医師が来なくなる街づくりが重要である」という仮説を、医師視点の意見も含めて検証することを目的とした。

インタビューの実施形式:

保健福祉センターの一室をお借りし、A班2人、B班3人、ファシリテーター1人の計6人で聞き取りを行った。

【分かったこと】

1. 稚内に開業するまでの経緯

埼玉出身。独協医科大学附属高校卒業後、愛知医科大学へ進学。小児医療に約20年従事。名古屋でNICUに勤務するも、指導医の退職により新生児診療から離れる期間があった。論文を通じて埼玉の医師と交流し、北里大学に移籍。名古屋市立大学と北里大学に籍を置くという異例の兼務を経験。北里大学ではNICUの責任者を務める。職場環境の変化(上司の復帰に伴う人間関係の悪化など)から退職を考えるようになり、約13年前に山田繁春氏から稚内での開業の誘いを受ける。稚内市の開業医誘致制度を活用し、制度利用第2号として開業。

2. 稚内で開業して感じたこと

- メリット

- ・北海道の人は人懐っこく温かい。
- ・診療科が少ないため他の医師から声がかかるなど協力関係もある。

●デメリット・課題

- ・医師・医療資源が不足し、地域医療が進まない。
- ・コロナワクチン接種の際、集団接種の必要性を行政に提案し実現したが、他の医師の協力が得られなかった。
- ・一部の医師は患者対応に熱心でなく、やる気を欠いた姿勢が見られる。
- ・医師を増やすだけでは解決せず、既存の資源をどう活かすかが重要。

3. 稚内の医療の現状と課題

- ・医師不足と連携不足が深刻。
- ・患者は市立病院に集中し、対応できないと札幌など大都市へ流出する。
- ・開業医の「かかりつけ医」意識が乏しく、点滴や投薬が収益目的化している場合もある。
- ・健診受診率(特定健診、がん検診)が低い→予防医療・早期発見の強化が課題。
- ・住民の健康意識は低く、医療への期待が乏しい層と高い層で二極化。
- ・「薬を出してくれればよい」と考える患者も存在。

4. 開業医誘致制度と今後

- ・制度を利用してこれまでに5件程度の開業があった。
- ・医師数はまだ不足しているが、既存の開業医は高齢化が進み、閉院の可能性がある。
- ・医療機関の経営は物価高・人件費増で厳しい→新規開業よりも病院サポート体制が必要。

5. 地域医療・予防医療について

- ・医療資源に限られる中で最大限効率的に活用することが重要。
- ・医療崩壊を防ぐには、市立病院と診療所の役割分担を明確にする必要があるが、現状では分化が進んでいない。
- ・予防医療は未着手に近い→健診受診率の向上、がん検診の促進、講演会などで市民啓発を進めたい。
- ・医師自身が患者としっかり向き合うことが最も大切。顔を見ずに診断・薬の処方だけで終わる医療は改善すべき。

6. その他の活動

- ・稚内空港の防災訓練に参加している。(北海道医師会から依頼)しかし他の医師の協力が得られず、緊急時の危機対応力に課題があると感じている。
- ・未熟児の子どもたちも教育を受ける権利があるとの信念を持ち、地域での医療・教育支援の必要性を訴えている。

【考察】

伊坂先生からのお話を通じて、稚内では医師不足に加え、医師同士や病院間の連携が十分でないことがわかった。また、人件費や物価の高騰により新規開業を進めるのは現実的でなく、病院のサポート体制を整える必要があるとの指摘があった。さらに、医師・市民双方に「かかりつけ医」の意識が乏しく、収益性を優先した診療や大病院への依存傾向が強いことも問題として挙げられた。これらを踏まえ、単に医師を増やすのではなく、限られた医療資源を効率的に活用する

ために、開業医と市立稚内病院の役割を明確にし、機能を分化させることが必要だと強く感じた。

また、予防医療がほとんど進んでおらず、市民の健康意識も高いとはいえないという現状を知り、山田氏のお話を聞いた後に考えた「患者を減らす」方向での取り組みがやはり効果的ではないかと考えた。薬だけを求める患者や健診を受診しない人など、医療への関心が薄い層に働きかけ、住民全体の健康意識を高めるヘルスプロモーションの推進が、今後の稚内に求められていると強く実感した。

■市立稚内病院研修医 岸雅大先生
鳥川怜誠先生(文責:鈴木実由)

【概要】

日時: 8/21 13時30分～14時

場所: 市立稚内病院

経歴:

岸先生...兵庫県出身。大学で文系学部を卒業、総合商社に入社したのち、再受験で大分大学医学部に入学、卒。現在研修医1年目。

鳥川先生...岐阜県出身。名古屋大学医学部卒。現在研修医1年目。

インタビューの目的:

稚内外から稚内に医師としてやってきた当事者である研修医のお二人から、市立稚内病院の研修プログラムや稚内市の印象についてお話を伺うことで、「医師が来なくなる街づくり」を考えるうえでのヒントを得ることを目的とした。

インタビューの実施形式:

市立稚内病院の一室をお借りし、A班3名、B班3名、計6名で聞き取りを行った。

【分かったこと】

1. 来稚するまでの経緯について

(岸さん) 北海道の合同プレゼンテーションに参加して魅力を感じたため。来ることに不安はあったが、今は動画配信サービスなどもあるためへき地であることに対して不便さは感じない。物理的な距離はあるが、社会的な距離は気にならなくなっている。

(鳥川さん) 北海道に住んでみたかった、北海道の中でも変わったところに行きたかったため。大学の時に車に乗っていなかったのが交通手段に関して不安があった。実際来てみた感想は、優しい先生ばかりで困っても助けてくれそう。

2. 病院での研修について

(岸さん)(鳥川さん) 院長が、自分がやりたいことをサポートしてくれる。指導医との距離が近く、マンツーマンで教えてくれる。大きな都会の病院のように機器が揃っているわけではないが、それを上回る自由度が魅力的。手技とか内視鏡とか、早い段階でやらせてもらえる。たとえば、手技とか内視鏡とか、早い段階でやらせてもらえる。いっぽうで市立稚内病院は二次医療までの対応をするため、三次医療を学ぶことはできないというデメリットはある。

3. 将来の展望について

(岸さん) まだ決まっていない。ただ、まだ4か月しかいないが、残りたいと思えるほど素敵な街ではある。

(鳥川さん) 稚内に残るかどうかは迷っている。他の場所で専攻医をとって稚内に戻ってくるのが現実的かもしれない。

4. 稚内の街・市民について

(岸さん)(鳥川さん) 待ち時間に起因する医師不信がある。また、都会の病院の方がクオリティーが高いのではないかというバイアスを感じることもある。

(岸さん) 市民に対して思うことは以下の二つ。喫煙率が高すぎることで、運動不足であること。稚内では女性でも喫煙率が20%を超えるらしい。また24時間営業のジムがないことが運動不足を表している。

(鳥川さん) 飲酒する店が多すぎるように感じる。一方で、それが市民の元気の源になっているようにも感じるので難しいところではある。

【考察】

市外からやってきた研修医さんたちの稚内の評価がとても高く、街としての高い魅力が裏付けられた。

また、実際に医療の前線に立つお二人が持つ、「市民の印象」はとても興味深かった。喫煙・飲酒・運動不足はどれも市民の健康意識の低さの表れだと思ったし、これをいかに改善するか、いかに医療を自分事として感じてもらうかが重要だと思った。

■ひかり町内会 佐藤忠男会長（文責:鈴木実由、鈴木理子）

【概要】

日時: 8/25 10時～11時

場所: 保健福祉センター

経歴:

小学校時代から稚内に住む。稚内高校を卒業したのち、稚内市役所に42年間勤務。北海道の社会福祉議会というところで福祉関係の仕事をしていた。その後、宗谷の振興局に9年いた。平成31年に町内会長に就任。今年で7年目。

インタビューの目的:

医療班としては、市民の一人として医療者ではない立場から稚内の医療や健康意識についてうかがうことで街の現状を知ることが目的とした。

また、Bグループの担当地域が「南地区」であったことから、南地区に位置するひかり町内会の会長として、「南地区の特徴」を知ることがも目指した。

インタビューの実施形式:

保健福祉センターの一室をお借りし、A班B班全員で聞き取りを行った。

【分かったこと】

ここでは、B班医療班が行ったインタビュー内容のみ記す。

1. 稚内市民の健康について

●健康問題として多いもの

飲酒量は人それぞれだが、昔ほどお酒の問題は多くない。高齢者の足腰や関節の問題が目立つ。

●健康意識の高さ

稚内市全体については断定できないが、決して低くはないと感じている。健康や病気の話は日常的によく上がるほか、ほとんどの市民が健康でいたいという意識を持っている。

●健康増進イベント・講演会について

内容は食事・睡眠・お酒の量・塩分量など、教科書に載っているような一般的なものが多い。佐藤氏自身は薬剤師による「正しい薬の飲み方」の講演に2～3回参加したことがある。医師による講演はひかり町内で開催したことはないが、講演会は大切だと感じており、今後も必要性を感じている。

●受診行動について

風邪や高血圧など、軽い症状では開業医にかかるケースも多くみられるが、それでも市立病院を受診する市民は多い。受診先は病気の重さで個人が判断しており、市立病院とかかりつけ医を区別して受診する意識は大体できていると感じる。

2. 南地区の特徴

・稚内駅が市の中心だが、現在は南地区の方が飲食店も多く、必要なものが揃う。市役所、市立稚内病院以外の主要な施設は南地区に集中している。産業も南地区に集まっている。

・南地区の人口は約5,000～6,000人。住宅街も多く、幼稚園・小学校・中学校もある。

・アクセス面：山は多くない。車社会であり、8～9割が車移動。バスは1時間に1～2本で、本数は少なく利用者も多くない。

【考察】

佐藤氏のお話を通して、健康増進イベントや講演会の必要性を強く感じていること、市民の健康意識は決して低くはなく、ほとんどの市民が健康でいたいと考えていることを知った。このことから、市民の健康意欲を活かし、市民自ら健康を目指すためにアクションを起こせるような後押しをしたり、そういった環境を整えたりするヘルスプロモーションの推進が稚内市に求められていると考えた。

また、開業医と市立病院を状況に応じて使い分ける意識が市民の間に浸透してきているという点も確認できた。これは医療者ではない市民の立場からの貴重な意見である。今後はこうした意識を維持し更に広げていくための取り組みも必要ではないかと考えられる。

【アクションプラン】(文責:鈴木理子)

【題名】

「ヘルスプロモーション」と「適切な医療資源の活用」を推進する

【解決を目指す課題】

稚内市では、市立稚内病院の医師不足が深刻であり、医師一人ひとりの負担は大きい状況にある。さらに外来患者数も多く、本来同病院が担うべき二次医療の役割が十分に果たせなくなる

おそれがある。加えて、市民の「大病院志向」や「かかりつけ医への意識の希薄さ」も重なり、開業医と市立病院の機能分化はまだ発展途上にある。

こうした課題に対し、稚内市では既に開業医誘致条例の制定や、市立稚内病院での自由度の高い研修カリキュラムの導入など、医師を増やす取り組みが進められており、一定の成果も見られている。そこで私たちは「医師の負担を減らす」という目的達成のために、「医師を増やす」視点だけではなく、「患者を減らす・分散させる」という新たな方向からのアプローチを考えた。具体的には、人々が自らの健康をより良くするために主体的に選び、行動できるよう支える「ヘルスプロモーション」を推進し、そもそも患者になる人を減らすことを目指す。また、市民に対してかかりつけ医と市立病院の役割の違いを理解してもらい、状況に応じて正しく医療機関を選択できるようにすることで、適切な医療資源の活用を実現し、患者の分散を促すことを目指す。

【アクションプランの概要】

- ヘルスプロモーションに関するアクションプラン
- ・稚内高等学校衛生看護科の学生と地域住民との交流

- 1.町内会単位で、地域住民が自分たちが抱える健康問題や、関心のある健康問題を話し合っ
てまとめ、看護学生に伝える。
- 2.看護学生は挙げられた健康問題について調べてまとめる。
- 3.看護学生が地域住民に向けて健康問題についての講習・講座を開き、知識を提供する。

- 適切な医療の活用に関するアクションプラン

- ・小中高生による医療マップの作成

市立稚内病院と市内の診療所の場所や名称に加え、「どの病院でどんな症状を診てもらえるのか」や「どんな時に市立病院を受診すればよいのか」といった目安も盛り込んだ医療マップを作成する。このマップは地域の小中高生が作成を担い、その過程で各医療機関を訪れて調査を行う。

【期待される効果】

衛生看護科の学生と地域住民との交流（講演会）では、住民は健康問題を挙げる話し合いの過程を通じて自分の健康について主体的に考えることが出来る。また、看護学生から知識を提供してもらうことで健康に関する情報を得ることも出来る。更に、平間氏が「医療者の存在そのものや、医療者と関わる機会をもつことは、それだけで健康になれる気がする。」とお話されていたように、将来の医療者である看護学生との交流はそれだけで健康意識増大に繋がる。これらの効果によって、稚内市民のヘルスプロモーションが促進されると期待される。過去には市立病院の医師が町内会で講演会を行ったこともあったようだが、多忙な医療者が頻繁に講演会を開催することはあまり現実的ではない。しかし、看護学生ならそのような医療者に代わって地域住民との交流の場を提供することができるため、講演会を実施する人材としては適切であると考えられる。

また、医療マップの作成によって、市民とかかりつけ医の結びつきが生まれ、適切な医療資源の活用や市立病院と開業医の機能分化が期待される。それだけでなく、医療マップの作成を小中高生に依頼することにより、小中高生と医療者との間で交流が生まれ、子供達の医療分野への興味を促進することが出来る。小中高生、ないしは住民が自分の住む地域の医療に関心を向けることは、地域医療改善の大きな道筋になると考えている。

3.発表スライド

稚内地域診断

Bグループ

実習報告

2025年度稚内地域診断について

2025年8月29日

慶應義塾大学
 薬学部4年 石原響
 薬学部2年 清水美衣奈
 看護医療学部2年 竹枝里紗
 看護医療学部2年 鈴木理子
 医学部2年 鈴木実由
 医学部1年 岩橋詔治



目次

- 01 生活班
- 02 教育班
- 03 医療班



稚内地域診断

生活班

2025年8月29日

生活班
竹枝里紗、岩橋詔治



事前学習 生活面



- 稚内では、
- ・地域共生社会を目指している
 - ・外国人の人は年々増えているが、現状としてバスの利用方法や支払い方法が分からない人が多い
 - ・在日外国人に日本語が分からない人が多い
 - ・稚内市民と交流したい人が9割以上

→稚内市民との交流が足りていない

仮説 生活面

稚内では外国人の方との交流が十分ではないのではないか。

稚内では、現在731人の外国人が暮らしている。稚内の約25%を占める。これは全国の「佐藤さん」と同じ割合。決して少ないとは言えない。

日本人 総数	731人	→2人
--------	------	-----



インタビュー内容

◎稚内の国際交流員さん、交流推進課主査さん、日本語教室の講師の方々

国際交流員さん

「現状として、稚内での国際交流は2、3年でしかできていない。」
 「現在、実施されている日本語教室や生活相談会を通して、外国人の方は稚内市民の方と交流出来て嬉しい。」
 「実際に日本語を使うことができて役に立ったようだ。」

交流推進課の方

「共存が大切。交流が深まれば異文化理解もでき、外国人にとっても過ごしやすい。」
 「市民にとっても外国人の方と交流できたら他文化を知る機会になり貴重だ。」

講師の方々

「古い習慣や根強い問題を新しい視点から解決してくれることがある。」

インタビュー内容

◎稚内で外国人実習生の受け入れをしている方

Q. 5年間の実習後、自国に帰国してしまう実習生を受け入れる意義とは？

A. 「期間が終わって自国に帰ってもまた稚内に来ることがある。日本人より真面目だから、老人ホームの利用者は実習生を望んでいる。来て終わりでない。」

→働き手不足の解消、多文化交流の促進

インタビュー内容

◎前稚内市教育相談所所長

「学校だけではなく地域全体で子どもを育てる必要がある。そのため、親御さんが町内会に参加し、子どもたちを地域全体で育てる地域PTAが13年前にできた。」
 →町内会でのつながりが強まった

「現在、子どものコミュニケーション能力が低下している。」
 →世代間でのつながりの希薄化



インタビュー内容

◎とある町内会の会長

- ・「子どもは高校まで9割稚内に残っているが、高校卒業の段階で9割以上が札幌、東京などへ出る。」
→若者の流出による、町や町内会の維持の難化
- ・「繋がりを強化するために挨拶運動を町内で積極的に行っている。」
→世代間を越えた連携の重要性
- ・「今では町内での群像が不要となり、若者が新たに町内会の活動に参加する意義が失われつつある。役員のほとんどが昔のメンバーのまま。」
→担い手の高齢化による町内会の衰退

事前学習 観光面



【稚内】

- ・日本最北端の地として有名
- ・年々、観光客が増えている
- ・宗谷岬やノシャップ岬など絶景がたくさん
- ・新鮮な海の幸
- ・涼しい気候

→観光客にしか見えない隠れた稚内の魅力があるのでは？



仮説 観光面

観光客の体験や声を通して、地元の人が稚内の隠れた魅力を再発見できるのではないか。



インタビュー内容（観光客）

Q. 稚内に来た理由

A. 「北海道旅行で日本最北端の地も見てみたいから。」
「礼文、利尻に行ってみたから。」



Q. 稚内に来て感じたこと

A. 「自然豊か。景色がいい。涼しい。」
「人少ないゆえに過ごしやすい。」 「ご飯が美味しい。」

Q. 稚内に再訪したいか

A. 「もちろん。」

観光客は滞在日数が短く、市民との交流が少ない
 →稚内の隠れた魅力に気づくことは難しいかも？
 →在日外国人に目を向けた方がいいのではないか

インタビューまとめ



在日外国人との交流不足

- ・実習生の増加
- ・交流がなく、生活に困る
- ・市民と関わりたい
- ・新しい視点で問題を解決できる



町内会の衰退

- ・担い手が高齢化
- ・町全体の繋がりが希薄化
- ・若い人に参加してほしい
- ・若者のコミュニケーション能力低下

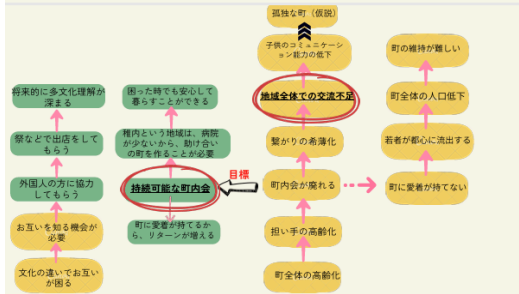


若者の流出

- ・市内に大学や就職先が少ない
- ・町の維持が難しい
- ・町への貢献感がなく愛着が持てない
- ・町内会役員に参加しない

生活系アクションプランの全体目標

多文化、多世代を越えた**地域共生社会**を作る！



アクションプラン

◎在日外国人の町内会参加

・町内会の高齢化に伴う担い手不足解消への期待

- ・お互いに異文化を知るきっかけに
- 例) お祭での**母国の料理の販売**
- 町内会を通じた**町内生活の理解**

- そのために：
- ・回覧板を多言語化
 - ・外国人が参加しやすいお祭内容の企画 など



アクションプラン

◎まちの先生プロジェクト

- ・まちに住む、すべての人が先生に！
- ☆市民同士で知識や経験を補充しよう。

例) おばあちゃんが小学生に手芸や書道を教える
中学生が高齢者にスマホの使い方を講座をする

- 地域に知り合いができる
- 子どもたちのコミュニケーションの機会の増加
- 町内会・地域のコミュニティに参加しやすく



稚内地域診断

教育班



2025年8月29日
教育班
清水美衣奈、石原響

事前学習

出生数はどんどん減少している

2000年から1/3まで減少している

経路省 国勢調査及び国立社会保障・人口問題研究所 将来推計人口、経路省 住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数



なぜこんなにも出生数は減少しているのだろうか？



仮説

稚内は子育てしにくい街である



インタビュー内容

◎稚内で子育てしているお母様

実際稚内は子育てしやすい街だと思いますか？

→しやすいと思う

インタビューした人全員がそう答えた

仮説の転換

稚内は子育てしやすい街である



インタビュー内容

～理由～

- ・イベントが多い
- ・学校の人数が少ない分、先生からの手厚いサポートが受けられる
- ・治安がいい
- ・ずっと住んでいるので慣れ親しんでいるから

稚内での子育てについて調べていくと稚内市は全国で初めて「子育て平和都市宣言」をし、市民が主役の「子育て運動」に取り組み充実した子育て環境を整備してきた。

ことを知った。



「子育て運動」とは...

地域の保護者や市民、保育関係者などが中心となって、「安心して子育てできるまちをつくろう」と取り組んでいる地域活動

学校・家庭・地域が相互に作用しあい、教育力を高めあうことが大切

インタビュー内容

◎稚内東中学校教諭

Q.今後稚内の子育てはどうなっていくべきだと思いますか。



地域のつながりを強くしたい

なぜなら、地域の方とのつながりを強くすれば、困ったことがあったときに助けてもらえ、子育ての孤立を防げるから。

インタビュー内容

◎宗谷小学校 校長先生

Q.今後稚内の子育てはどうなっていくべきだと思いますか。



それぞれの地域を挙げて、学校にも足を運んできてほしい。全世代で子育てを盛り上げていきたい。

小中学校（中央小、宗谷小、東中）

Q.地域の方とのつながりはありますか？



ある。一緒にお祭りを楽しんでいる。

しかし...

お祭り以外で地域の方と関われる機会がほぼない

私たちの考え

地域と学校とのつながりをもっと強くすべき

アクションプラン

お祭り以外に地域の方と関われる機会を作りたい



そうすることにより困ったことがあったときにみんなで助け合えるような街を作りたい

アクションプラン

①街の清掃ボランティアに参加する

(・元々ある声問海岸クリーン作戦、宗谷路クリーン作戦に参加してもらう
・地域の方に学校周辺に来てもらって一緒に清掃してもらう)

②昔遊び体験会を開く

(地域の高齢の方に学校にきてもらって昔遊びを教えてください)

けん玉、こま回し、あやとり、めんこなど
授業内でやると児童は全員参加できる
児童の祖父母に授業の一環として来てもらう

アクションプラン

①学校周辺で行うボランティア清掃について

生徒にチラシを作ってもらおう
→学校周辺のお店を周りチラシを貼っていただけに交渉する。
(地域探求の授業の一環で)
それに加えて、そこのお店の仕事のことをインタビューして地元にあるお仕事を学ぶ。

⇨地域にある職業を学ぶ機会にもなるボランティア清掃の宣伝にもなる。

アクションプランの目的

そうすることで、地域の方々とつながりを作り
子育ての孤立化を防ぐ

STEP 1 既存の情報を集める

STEP 2 情報を分析、健康課題の特定

事前学習 生産年齢人口の減少



・生産年齢人口が減少している
総務省のホームページ「総務省統計局(2019年度～2024年度)」
<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/shisei/tokai/tokansyo/>

・特に若年者人口(15歳から29歳)は、大幅な減少となっている
稚内市高齢地域持続的発展まちづくり計画(令和3年度～令和6年度)
<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/files/0005700/0005718/kazokukaku.pdf>

STEP 1 目的と仮説

STEP 2 情報を分析、健康課題の特定

STEP 3 仮説を立てる

生活班 「若者の流出を危惧する声」

目的：若者の流出抑制

「日本の最北端 稚内には、若者が働ける十分な環境がないのでは」

残りたい、戻りたいと思える街づくり

STEP 2 情報を分析、健康課題の特定

STEP 3 仮説を立てる

課題

若者の定着、U・I・Jターンの推進

稚内市道徳地域持続的発展市町村計画(令和年度～令和7年度)
<https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/FILES/00002500/00002501/wakkanaiaku.pdf>

Uターン：地方で生まれ育った人が都心で一度勤務した後に、再び自分の生まれ育った故郷に戻って働くこと

Iターン：生まれ育った故郷以外の地域に就職・移住すること

Jターン：地方で生まれ育った人が一度都心で働き、その後また故郷とは違う別の地方に移住して働くこと

→我々学生から見て、最も現実的なのは「Uターンの推進」

STEP 4 街歩き、ヒアリング

高校生アンケート

将来はどこで働きたいですか？

→およそ半数が将来稚内の外へ行くことを考えている

STEP 4 街歩き、ヒアリング

中学生・高校生聞き取り

①稚内以外(道内、道外含む)で働きたいと答えた学生
 →「将来の夢、やりたいことが稚内の外でしかない」

②稚内で働きたいと答えた学生
 →「地元に着用があるから」「安心感があるから」

⇒一方で、「稚内市で何ができるのか分からない」という意見も

STEP 4 街歩き、ヒアリング

STEP 5 アクションプラン

アクションプラン

稚内で育った学生の
 「稚内市で何ができるのか分からない」
 「稚内市で働きたいのに働けない」

→稚内市でできる、「新しい仕事の形」を提供

STEP 5 アクションプラン

リモートワーク推進事業

サテライトオフィス、コワーキング拠点の設置・改修

- サテライトオフィス(Satellite Office)
 企業の本社や主要拠点から離れた場所に設置されるオフィスのこと
- コワーキングスペース(Coworking Space)
 さまざまな所属やバックグラウンドをもつ人々が「共に働く」スペースのこと

→稚内に「新しい働ける場所」を整備し、新たな人の流れ・雇用・交流を生み出す

STEP 5 アクションプラン

他の地域にて行われているリモート推進

- IT人材を北の地へ回帰推進・「サケモデル」(北海道北見市)
<https://dx-navi.soumu.go.jp/support/telework/article/003>
- 大船渡テレワークセンター(岩手県大船渡市)
<https://www.ofunato-tc.com/>
- 自営型テレワーク推進事業「KADO」(長野県塩尻市)
<https://www.city.shiojiri.lg.jp/soshiki/10/16988.html>
- テレワークのまち郡上推進事業(岐阜県郡上市)
<https://www.hubgujo.com/telework-in-gujo/>

STEP 5 アクションプラン

サテライトオフィス、コワーキング拠点の設置・改修

対象拠点	実施内容
<ul style="list-style-type: none"> 空き家、空き店舗 旧庁舎、廃校などの公共施設 民間施設の一部改修 	<ul style="list-style-type: none"> Wi-Fi/電源/デスク等の整備 防音ブースや会議室の設置

稚内市民の誰もが利用できる、新しい労働環境

STEP 5 アクションプラン

稚内市でできる、「新しい仕事の形」

日本の最北端、稚内に
 稚内市でできる「新しい仕事の形」を提供し
 稚内に残りたい、戻りたい学生が十分に働ける環境を
⇒稚内で育った若者に「選ばれるまち」へ

稚内地域診断

医療班

2025年8月29日
 医療班
 鈴木理子、鈴木実由

STEP 1 既存の情報を集める

事前学習

医師不足

人口減

医療・福祉サービスへの不満

STEP 2 情報を分析、健康課題の特定

目的と仮説

目的：医師を増やしたい！

いま、稚内市が取り組んでいること...

- 市立稚内病院による積極的な **研修医誘致**
- 行政による **開業医誘致**
- 市民による「**医療と健康のまちづくり応援団**」

医師が来たくなる街づくり



市立稚内病院 医師
「研修医の枠はすべて埋まっている。なんなら落としている。」
「予防医療に関してはなにもできていない。」

医療と健康のまちづくり応援団の方
「現状、人口に対して市内開業医の数はさほど緊迫していない。」
「健康に関して、行政による介入より、市民自身の意識が大事。」

勤医協の方
「健康は医者次第だと思っていたが、自分で気を付けなければ。」
「医療者と関わると、それだけで健康になれる気がする。」

- ・ 医者を増やす取り組み（研修医・開業医誘致制度など）はわりと充足している？
- ・ 医師誘致に対して私たちが出来ることは少ないか？（財政面など）

「医師を増やす」方向性はイマイチ…？

どうして私たちは医師を増やしたいのか？
→ 「医師の負担を減らすため」

① 医師を増やす

② 患者を減らす 分散させる

患者を減らす・分散させるために重要になるポイント

①ヘルスプロモーション

②適切な医療資源の活用

・ 人々が自らの健康とその決定要因をコントロールし、改善することができるようにするプロセス（オタワ憲章・バンコク憲章）



人々が自分の健康をより良くするために、
自分で選び、行動

できるように支える取り組み



健康を支えるのは「医者」ではなく「**自分自身**」
個人だけでなく**環境**の整備も大切

受動的な健康から**能動的な健康へ!!!**

病院勤務医：「予防医療についてはなにも考えていない」
「健康意識はこの地域の人は希薄かも」
「ここ最近イベントを催していないが、案内に来てくれる人は非常に多い」

病院勤務医：「喫煙率が高い」「運動不足」「飲酒する店が多い」

開業医：「予防医療に関しては全く普及していない」
「まだまだこれから」

勤医協の方：「健康への関心はあるがイベントがない。または減ってきている」

→ 稚内のヘルスプロモーション・予防医療は**発展途上!!!**

稚内高等学校衛生看護科の学生と地域住民との交流

町内会単位で話し合い！



健康問題の提起

地域住民で自分達が抱える健康問題を挙げ、看護学生に伝える



健康問題に関する調査

看護学生は住民が挙げた健康問題について調べ、まとめる



健康問題の講習

看護学生が住民に健康に関する講座・講習を開く

- ・ 住民が自分の健康について**自ら**考えるきっかけになる
- ・ 健康に関する情報を学べる
- ・ 将来の医療者である看護学生との交流は**健康意識増大**につながる
(勤医協の方「医療者と関わるとそれだけで健康になれる気がする」)

人手が足りない医療者に代わって、看護学生なら交流の場を提供できる!!!

→ **ヘルスプロモーション**

小中高生による医療マップの作成

医療マップとは

STEP 5 アクションプラン

なんだか体の調子が悪い... → とりあえず市立稚内病院

かかりつけ医を作ろう

でも、どんなときにどこへいけばいいの...?

医療マップ

小中高生の作成協力

STEP 5 アクションプラン



- ・どの病院が、どんな症状を診てくれるのか?
・どんな時に市立稚内病院へ行けばいいのか?

小中高生が各病院に調査
→医療マップを作成
→市民に共有

期待できる効果

STEP 5 アクションプラン



市民 かりつけ医
→適切な医療資源の活用
それだけでなく

小中高生 医療者
→医療分野への興味を促進
→地域医療改善への道筋

アクションプランまとめ

生活班

- ・在日外国人の町内会参加
・まちの先生プロジェクト



教育班

- ・街の清掃ボランティア参加 / 昔遊び体験会の開催
・稚内市でできる「新しい仕事の形」を提供

医療班

- ・看護学生による地域住民への健康講習
・小中高生による医療マップの作成

参考文献

教育班

- ・総務省 国勢調査及び国立社会保険・人口問題研究所 将来推計人口
総務省 住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数
https://jp.gpfreak.com/public/detail.jp01055000001001214/18
・稚内市で活躍したい企業
https://www.kosodateyeshi.city.wakkanai.jp/LGArticle/Index/1807DestinationId=04
・稚内市のホームページ「稚内市統計書(2019年度～2024年度)」
https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/akishi/fokei/fokei.html
・稚内市道徳地域持続的発展市町村計画(令和3年度～令和4年度)
https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/fokei/00015700/00015720/assohokaku.pdf
・人材を北の地へ回帰推進「サケモデル」に期待を寄す(北海道北見市)
https://ds-navi.soumu.go.jp/support/telework/article/003
・大船渡テレワークセンター(長野県大船渡市)
https://www.ofunato-tc.com/
・自管型テレワーク推進事業「KADO」(長野県塩尻市)
https://www.city.shinji.jp/soohi/10/0303.html
・テレワークのまち郡上推進事業(岐阜県郡上市)
https://www.hubgujo.com/telework-in-ggujo/

生活班

- 稚内外国人人数(8月27日現在)
https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/krashi/todokedetetsuduki/jaminido/jinko.html
9割以上の外国人が日本人と交流したい
https://mykoko.jp/article/012149/9212277/9247517

医療班

- 北海道のホームページ「北海道医師会(令和3年度～令和4年度)」
https://www.hokkaido-medical.or.jp/fokei/fokei.html (最終閲覧: 2025/08/28)
厚生労働省 医師会長会連合 対談式
https://www.hokkaido-medical.or.jp/fokei/fokei.html (最終閲覧: 2025/08/28)
報告書「稚内市の人」
https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/fokei/00015700/00015720/assohokaku.pdf (最終閲覧: 2025/08/28)
報告書「まちづくりに関するアンケート調査-市民意識調査報告書-」
https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/fokei/00015700/00015720/assohokaku.pdf (最終閲覧: 2025/08/28)
報告書「地域住民のアンケート」
https://www.city.wakkanai.hokkaido.jp/fokei/00015700/00015720/assohokaku.pdf (最終閲覧: 2025/08/28)

謝辞

- 北海道稚内高等学校
校長 小林 洋介 先生
教頭 山本 健三 先生
進路指導部 教諭 川田 亮 先生
高校生の皆様、保護者の皆様
稚内大谷高等学校
校長 平岡 祥孝 様
高校生の皆様、保護者の皆様
株式会社恵産設備
会長 梅村 俊範 様
国際交流員
グエン・ティ・ミン・フォン 様
国際交流推進委員
佐々木 結平 様
日本語教室講師の皆様
市立稚内病院
院長 園枝 保幸 先生
医師 澤 雅大 先生
鳥川 裕誠 先生
医師会
山田 繁春 様
クリニックはく
院長 伊坂 雅行 先生
ひかり町内会
町内会長 佐藤 忠男 様
道北勤労者医療協会
地域連携室長 平岡 信雄 様
訪問看護 村上 和 様
ケアマネジャー 出倉 幹也 様

謝辞

- 稚内市立稚内中央小学校
校長 川原 修子 先生
小学生の皆様、保護者の皆様、先生の皆様
稚内市立宗谷小学校
校長 塩原 千夏
小学生の皆様、保護者の皆様、先生の皆様
稚内市立稚内東中学校
校長 吉崎 健一
中学生の皆様、保護者の皆様、先生の皆様
宗谷病院
訪問診療に携わっている皆様
教育相談所所長
佐々木 康 様
稚内在住のお母様方

4.各参加者の学び

薬学部4年 石原響

稚内での地域実習を通じて、理論や知識だけでは見えてこない地域医療の現実に触れることができた。特に、医療従事者と地域医療の応援団の方々との連携に関するお話からは、「人手不足」や「外部支援」といった言葉では語りきれない、人と人の信頼関係や熱意によって医療が支えられていることを実感した。そこには、単なる機能的な連携ではなく、現場に根ざした強い思いや責任感があり、それこそが地域医療の土台となっていた。こうしたことは、実際に現地を訪れ、空気に触れ、人の声を直接聞くことで初めて見えてきた視点である。また、私たちに対して示してくださいました、現地の方々の温かく真摯な姿勢にも心を動かされ、今後も何らかの形で「稚内」という場所に関わっていきたいと強く感じた。医療の研究に関わる立場としても、知識や技術が現場に届き、活かされるための仕組みに目を向ける重要性を学んだ、非常に貴重な経験であった。

薬学部2年 清水美衣奈

稚内では多くの方にインタビューをさせていただき、急なお願いにも関わらず快く応じてくださったことから、人の温かさや地域の方々の協力的な姿勢を強く感じた。また、現地の方々と交流を深める中で、BBQに誘っていただく機会もあり、地域に受け入れていただいた喜びや、人とのつながりが広がっていく大切さを実感した。さらに、今回の実習では初めて自分たちで課題を立て、その解決方法を考えるというプロセスを経験した。これはこれまでの学びを実際の地域に活かす挑戦であり、うまくいかないこともあったが、仲間や地域の方々と協力しながら進める中で、考える力や行動する力を培うことができた。この経験は大きな達成感となり、自分自身の成長や自信につながったと感じている。

看護医療学部2年 鈴木理子

稚内での地域診断を通して、机上で集めた情報に基づいた分析と、実際に現地に赴いて得られる結論は、時として大きく異なることを体感した。私は医療班として稚内の医療について調べていたが、東京での事前学習の段階では「稚内の医療は非常に逼迫しており、とにかく医師を増やさなければならない」と考え、そのための方法ばかりに目を向けていた。

しかし臨地実習に赴き、現地の方々のお話を伺う中で、ネット上の情報だけでは把握しきれない地域住民の熱い思いや、専門的な立場からの意見に触れることができた。その経験を通じて、「医師を増やす」という発想だけでなく、「患者を減らす」という別の方向性から問題を捉える視点を得ることができた。

昨今はインターネットを通じて容易に情報が得られる便利な社会となったが、情報を集めるだけでは本質的な解決にはつながらない。自らの足で現地を訪れ、実際に体験しながら問題を理解し、そこで得た学びを基に課題に向き合うことの重要性を、この2週間を通して学ぶことができた。

医学部2年 鈴木実由

稚内の方々のあたたかさに包まれ、幸せいっぱい2週間でした。まちの課題に対してまち全体が危機意識を持ち、改善に向けて同じ方向を向いている、その一体感が強く感じられました。殺伐とした都会の満員電車で揺られながら、ささいなトラブルで口論になっている人々を見て、稚内を思い出しあの優しい世界に戻りたいと思う日々です。

人口減少、脆弱な医療体制など、課題は山積みかもしれませんが、それを越える魅力があると感じます。魅力をどのように生かし、改善策につなげるか、その思索は迷路のようでとても難しかったです。貴重な経験でした。地元の方々にとってのあたりまえは、私たちにとっては抱えきれないほどの魅力であることを知っていただきたいし、地元の方々と私たち、バックグラウンドの

全く異なる立場が、同じ課題についてあらゆる視点から考えをめぐらせることの重要性を強く学びました。

看護医療学部2年 竹枝里紗

私は稚内市での2週間の実習を通して、本当に人と人の結びつきの強さを感じました。現代では、インターネットが普及し、遠い距離があっても、対面でなくても、つながってられる世の中です。しかし、皆さんが対面で会い、お話をするところに人と人が心から楽しみ支え合って行きたいと思える瞬間があるように感じました。それと同時に、私は将来このような結びつきを地域で作ることができる人間になりたいと強く思うようになりました。それくらい稚内の皆さんのつながりや支え合いの姿は東京にはない、非常に価値のあるものだと感じます。稚内市と東京のネットワークの強さの違いについて、その原因も含めてもっと知りたいと思いました。

医学部1年 岩橋諄治

稚内を訪れてまず感じたのは、人の温かさだった。稚内空港までのお迎えから始まった2週間の旅は、地元の人々の温かさに包まれた時間だった。お泊まりさせていただいた自然の家の方々の協力、毎日私たちのために動いてくださった関係者の方々の支えがあったからこそ、安心して充実した日々を過ごすことができた。また、稚内は地域のつながりが強く、住民同士が協力し合う姿が印象的だった。地元の子どもたちも明るく挨拶してくれて、その素直さと元気さに心が和んだ。さらに、海産物を中心とした食べ物はどれも新鮮で美味しく、特にホタテやウニの味は忘れられない。この人・地域・自然が調和する魅力ある町での学びを将来に活かし、地域に貢献できる人材になりたいと思う。

5.謝辞

このたびの2週間にわたる実習に際し、皆様より多大なるご支援とご協力を賜りましたこと、心より厚く御礼申し上げます。

ご多忙の折にもかかわらず、インタビューやアンケートにご協力いただき、誠にありがとうございました。皆様のご厚意のおかげで、実習を通して多くの学びと貴重な経験を得ることができました。

今回得た学びを、今後の学生生活はもちろん、将来の臨床現場においても活かしてまいります。

勤医協宗谷友の会

会長 飯田 光 様

稚内市 生活福祉部 健康作り課

職員の皆様

北海道稚内高等学校

校長 小林 洋介 先生

教頭 山本 雄三 先生

進路指導部 教諭 川田 亮 先生

高校生の皆様、保護者の皆様

稚内大谷高等学校

校長 平岡 祥孝 様

高校生の皆様、保護者の皆様

稚内市立稚内中央小学校

校長 川原 修子 先生

小学生の皆様、教員の皆様、保護者の皆様

稚内市立宗谷小学校

校長 塩原 千夏 先生

小学生の皆様、教員の皆様

稚内市立稚内東中学校

校長 吉崎 健一 先生

中学生の皆様、教員の皆様

稚内市教育相談所

所長 佐々木 康 様

CS統括コーディネーター 本間 正博 様

市立稚内病院

院長 國枝 保幸 先生

医師 岸 雅大 先生

鳥川 怜誠 先生

医師誘致応援団

応援団長 山田 繁春 様

クリニックはぐ
院長 伊坂 雅行 先生

ひかり町内会
町内会長 佐藤 忠男 様

道北勤労者医療協会
地域連携室長 平間 信雄 様
訪問看護師 村上 和 様
ケアマネジャー 出倉 幹也 様

宗谷医院
訪問診療に携わっている皆様

株式会社恵菱
会長 梅村 俊範 様

国際交流員
グエン・ティ・ミン・フォン 様

国際交流推進主査
佐々木 陽平 様
日本語教室講師の皆様